岩手大学教育学部研究年報　第39巻（1979）

K家・家計記録の生活史的研究　そのII

―消費構造の推移を中心として―

後　藤　和　子*

（1979年7月6日受理）

緒　　言

本研究は東北の一農家K家の家計記録の長期分析により，家計並に家計構造の推移をあきらかにすると共に，家庭経営的な視点から考察を試みようとするものである。前報その I[1] では，生活基盤をなす所得に焦点をしぼり，K家の所得構造の推移を家族周期並に社会経済的な背景との関連において明らかにし，あわせてどんな経営的配慮がなされたかについて考察した。本稿では家計記録の消費支出に現われている生活財の種類及びその消費量の推移を検討し，消費構造と家庭経営とのかゝわりを考察することを目的とする。

I　研究資料と方法

1　研究資料

前報と同様，山形県上ノ山市西郷字高松・K家所蔵の，父子三代80年間にわたる「自作農家家計に関する諸記録」である。この資料は原簿ではなく，K家の諸記録をありのまゝ写し書きした復刻報告書[2] であることを断わっておく。

2　研究方法

資料の分析期間は，明治41年～昭和28年（明治43年欠年）まで45年間であり，分類集計の方法は前報に記載の通りである。本稿では特に消費支出の分析を中心とし，次の視点から検討した。

(1)　費目毎に生活財購入品を類別集計し，生活財購入の変遷と消費構造の推移を社会経済的変動及び家族周期との関連で考察する。

(2)　消費構造の変動を明確に捉えるために45年間を前の方法と同様 [10] 期に時期区分し，（第1図参照）各時期区分毎の平均額を求め変動の傾向を明らかにする。

(3)　K家の生活構造を再現することを試みたが，資料は現金収支の記録のみで，他に日誌，覚書きの類が全くないため，経営者K氏の経営に対する意識や関心また経営計画等，K家の生活を多面的に捉える上で資料の制約があった。そこで再三K家を訪問し，三代目記帳者であるK氏の孫夫婦から聞取りを行なった。またK氏を知る古老土屋氏を訪ね，それぞれの回想をきき参考にした。しかし現存者はK氏と世代がはなれており聞きとりにも限界があ

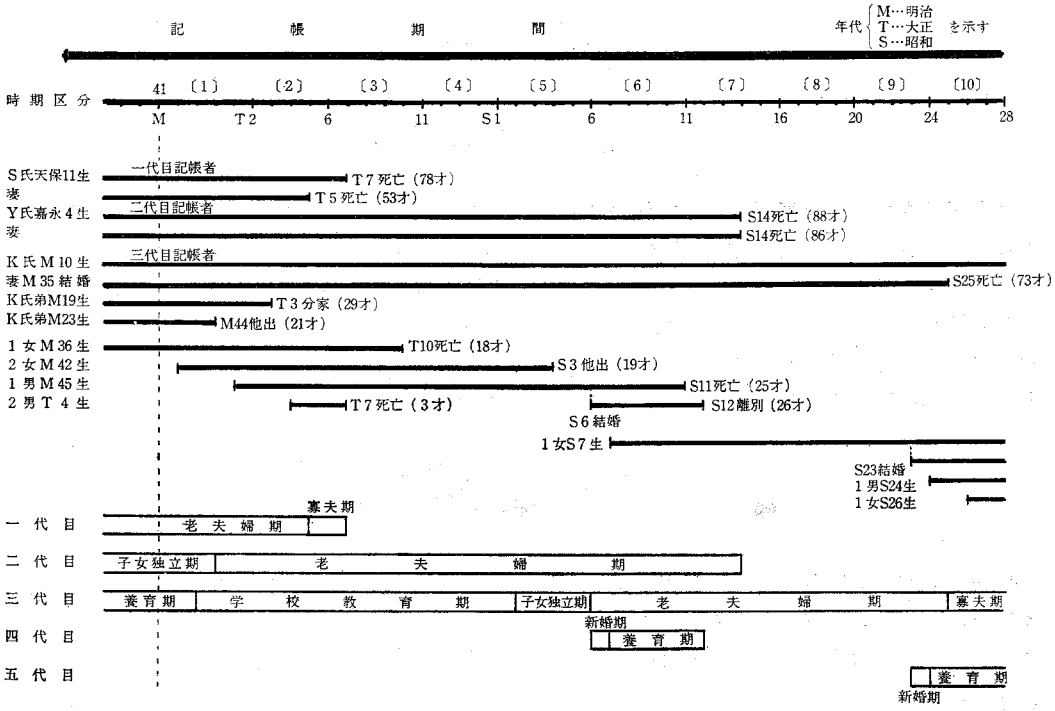
---

*　岩手大学教育学部

1)　拙稿：　K家・家計記録の生活史的研究　そのI　―所得構造の推移を中心として―　岩手大学教育学部研究年報　第38巻（1978）

2)　柏倉亮吉・山崎吉雄編：　農政調査会（1955）

り不明な点も多い。そこでその時々の支出状況を国内の経済状態や農業政策，社会変動等から察知したり，K家の家族周期から判断し，聞取りによって補うほかはなかったのである。方法としては：①消費構造が社会の動きや家族周期とどうかゝわりあったか，②K氏が家族機能の実現のためにどのような配慮，対応の仕方をしたか等経営のあり方に接近することを試みる。



第1図　時期区分・K家家族周期

3　経営者のプロフィル

前記のように本研究の資料は，明治5年からS氏，Y氏，K氏と父子三代80年にわたり記録された家計簿であるが，今回分析の対象とした明治41年以降は二代目Y氏（K氏の父），三代目K氏の記帳によるものである。明治後期の〔1〕期および〔2〕期は父Y氏が戸主であり，家長としての役割を遂行し，記録を継続してきた。K氏は大正9年に父より経営権の移譲を受けると共に大正10年以降記録をはじめた。戸籍上家督相続は大正13年であるが聞きとりによると明治末年頃よりK家の事実上の経営者はK氏であったと言われ，その頃K氏は30代の壮年であった。つまりY氏，K氏はともに家長として生産面はもとより，消費生活の全般にわたって家族を扶養統率し家政をとりしきったのである。

前報に述べたように，K家の明治後期の農業経営は，家族労働力を主として常雇い，季節雇いで労働力を補なう自営農型で，家長Y氏は農業，養蚕に自ら従事した篤農家であり村人の信望があつかった。明治中期から自作地をふやし中農からしだいに中農上層へ，さらに大農へとK家の土地拡大をはかった。その結果明治後期は部落において第一級の土地所有者となり，大農にちかい経営規模となったのである。Y氏の長男が紙販売を独立して営むために家を出た関

係で，K氏は二男であったが家督をつぐことになった。氏のプロフィルを略記すると次のようである。

K氏は20才代（明治30年代）にリュウマチにかゝり，その後10年間程慢性的痛みに悩まされ歩行が不自由であった。当時父Y氏は3年間水垢離をとりK氏の治癒を祈念し，また氏も13年間1日も欠かさず村の観音さまに日参した。父子ともに神信心が厚く，また強固な精神力の持主であった。しかし生涯完治することはなく，従って一人前の百姓として労働にたずさわることはできなかったと云われている。聞きとりによるとK氏は時折田畑を見廻わったが，趣味の謡曲に生き甲斐を求め，師匠の免許を取得し弟子をとって教えていたといわれている。父Y氏が老年に至るまで働き通し，農業技術について村人を率先指導する精農として信頼されていたのとは対照的な生き方をしている。

明治後期において米作を主体に養蚕，製紙業の副業をもつ大農的自作農であったK家が，大正，昭和戦後に至る時代の激流と，家族の働き手や後継者の死にあい，中農から零細農へと没落し，自家の経営崩壊を必死にくい止めつゝ，戦後は自作農再建への道をたどることになったのである。この間の生活の変化を家計費総額の推移から概観することにする。

II 結果と考察

1 家計費の変動

家計費はK家の家族周期や特殊事情はもちろんのこと社会経済的な要因によって増減がみとめられる。経時的な推移は第1表に示した。第2表に示す時期区分別の平均額でみると，明治後期〔1〕期の家計費は328.929円であるが，大正前期〔2〕期は低下をきたし298.413円を示している。この時期はK氏の弟の分家で家族数は1人減少したが，子守と家事使用人の雇用によって人数はむしろ増えている。従って家計費の減少は所得の低下に対応したものと考えられる。すなわち大正3年K氏の弟の分家に伴なう土地分与によって農業所得は前期〔1〕期より大巾に減少し，可処分所得は〔1〕期に比較して17.3%もおちこんでいることが前報で明らかにされている。こうした所得の低下に対応して家計費のきりつめが行われたものであり生活に対する堅実な姿勢がうかがわれる。

大正中期にあたる〔3〕期は，家計費が一挙に〔2〕期の4.5倍にあたる1,344円に増大している。これは第一次大戦景気による物価騰貴の影響を無視できないが，物価指数[3]の上昇を考慮した実質家計費によっても〔2〕期の2.3倍の増大を示している。前報で述べたように大戦景気による米価の高騰，養蚕の拡大，製紙の高収益に支えられ，戦前期間中最高の純所得を得た時期である。こうした所得の増大に対応して，消費もまた伸びている。これは，生活程度の実質的向上を反映したものである。しかし他の要因としてK家の特殊事情があげられよう。大正7年にS氏と二男，3年後の10年に長女が死亡し，〔3〕期は3人の葬式が行なわれている。これに伴なう臨時的支出が少なからず家計費の増大に影響を与えたことを見逃がすことはできない。

〔4〕期～〔6〕期は家計費の漸減を示している。この間，大正9年の戦後恐慌，続く翌10年は凶作，その後慢性的不況から昭和恐慌を経て日中戦争に至っている。家計費が最低であったのは昭和初期の世界恐慌につゞく農村不況の時期を背景とした〔6〕期で，家計費は大正中期〔3〕期のおよそ二分の一に当たる701.21円に減少しいてる。これは不況に伴なう農産物価格

3) 安度良雄編：近代日本経済史要覧　長期統計　4 (1977)

第 1 表 年度別

年次	食料費 主食	食料費 副食	食料費 調味料	食料費 嗜好品	商店払	食料費小計	住民費 住宅修繕	住民費 家計家具	家計光熱水道費	被服費
明治41	—	5.795	6.836	41.185	13.27	67.086	29.47	26.583	11.265	59.776
42	0.47	13.895	16.742	28.602	2.60	62.309	40.71	21.041	11.365	70.503
44	0.37	9.868	17.425	27.893	17.19	72.746	60.67	45.722	13.305	74.745
大正 1	7.45	16.61	22.19	12.11	33.61	91.97	35.07	14.96	29.18	67.72
2	0.87	30.50	10.405	39.805	25.61	107.19	73.98	11.515	14.53	57.01
3	1.13	10.945	15.51	13.565	19.805	60.955	15.68	17.42	17.58	29.365
4	1.49	11.615	13.485	12.97	41.92	81.48	51.83	16.70	11.49	32.85
5	0.73	11.175	11.82	16.01	17.52	57.255	42.145	13.43	5.04	60.32
6	0.73	14.515	12.40	11.345	17.245	56.235	12.425	6.81	33.265	68.825
7	0.52	26.68	11.055	19.395	18.54	76.19	92.621	11.225	81.047	75.33
8	2.82	40.775	36.20	52.67	59.56	192.025	1693.66	17.48	66.22	165.16
9	1.73	53.09	23,79	30.025	127.71	236.345	390.30	20.38	24.76	138.63
10	1.26	44.22	24.77	30.48	81.33	182.06	67.67	111.38	33.51	131.27
11	8.61	58.26	26.04	26.38	775.16	894.45	30.85	29.49	58.62	142.55
12	2.99	55.15	22.77	31.89	119.18	231.98	6.685	247.23	71.70	151.01
13	4.10	58.16	21.86	22.83	85.75	192.70	0.70	14.48	60.29	173.37
14	5.50	53.865	21.36	36.68	129.86	247.265	132.01	51.66	35.90	116.33
15	6.16	56.23	36.96	34.44	127.00	260.79	46.15	13.24	57.98	185.20
昭和 2	4.36	54.97	21.91	32.57	124.65	238.46	130.16	9.09	46.45	146.78
3	5.36	45.13	23.53	47.07	99.58	220.67	47.71	30.05	30.27	122.03
4	3.76	58.66	18.44	30.01	120.59	231.46	66.41	20.42	16.31	166.45
5	0.97	68.29	18.32	22.76	90.89	201.23	18.70	16.35	42.23	151.12
6	3.78	30.19	10.64	26.56	60.60	131.77	63.21	7.47	24.48	96.83
7	2.05	27.50	13.84	26.46	57.67	127.52	53.95	29.36	40.22	76.01
8	4.15	48.25	18.64	29.83	73.81	174.68	14.79	18.15	58.42	89.26
9	19.47	42.72	22.99	35.58	84.52	205.28	62.00	7.86	53.67	70.52
10	1.43	25.26	11.97	26.03	128.47	193.16	49.40	13.87	45.47	75.38
11	15.31	37.31	22.01	30.96	115.23	220.82	39.59	13.86	51.44	65.60
12	5.11	44.48	9.67	41.48	102.63	203.37	56.06	21.34	46.12	62.77
13	2.43	48,28	28.30	47.79	67.72	194.52	5.00	10.90	57.55	83.74
14	2.97	54.58	27.91	55.08	128.62	269.16	32.07	22.45	40.00	91.44
15	2.85	55.35	10.06	74.35	48.97	191.58	4.60	11.27	16.39	27.09
16	3.33	77.63	27.19	82.02	—	190.17	116.10	23.63	39.61	67.86
17	2.67	42.67	17.54	54.14	5.00	122.02	67.61	14.00	25.53	72.01
18	0.15	26.64	16.30	53.54	—	96.63	22.80	9.40	16.48	124.65
19	3.10	23.74	21.11	41.15	—	89.10	20.00	12.05	52.60	44.02
20	13.87	86.22	16.04	87.70	—	203.83	25.00	19.95	46.59	72.70
21	142.90	354.30	256.88	466.50	—	1220.58	214.00	291.35	62.30	587.77
22	20.00	5484.63	1598.73	3400.60	—	10503.96	20.76	244.00	341.15	4770.71
23	—	2205.40	1472.70	2425.50	—	6103.60	1238.00	795.00	2399.10	11586.50
24	160.00	3411.	2870.25	6027,50	—	12468.75	11826.	882.	1726.	6188.60
25	798.	3792.	5154.	7327.	—	17071.	2950.	1285.	2020.	10545.
26	585.	3474.	3621.2	4855.	—	12535.2	7239.	1813.	2476.	11935.
27	485.	4190.	7742.	9775.	—	20392.	8400.	5930.	5293.	15065.
28	1020.	5849.	6381.	9783.	—	23033.	16325	3360.	4805.	26970.

消　費　支　出　　(単位　円)

保健衛生費	交通通信費	教育費	教養娯楽費	交際費	たばこ	こずかい	家事使用人費	雑費	臨時費	不明金	家計費合計
12.835	0.81	20.0	3.62	19.765	—	6.08	3.878	8.49	—	3.38	273.038
6.43	1.28	35.24	11.605	7.295	0.21	16.26	7.65	30.405	—	3.77	326.073
11.16	1.89	37.10	20.378	15.855	—	8.915	5.515	2.72	19.395	0.70	390.816
12.32	0.21	0.31	7.83	19.33	—	1.79	9.09	24.75	—	4.37	300.25
4.565	0.47	2.832	15.37	8.825	—	5.755	13.48	28.295	—	8.62	352.437
13.83	3.76	0.77	8.725	11.195	—	10.02	21.56	24.38	95.91	4.18	335.33
10.98	1.55	43.50	3.07	4.48	—	7.50	7.82	12.175	—	2.43	287.855
7.17	1.30	3.64	13.48	14.47	—	16.615	4.73	15.45	15.00	3.57	273.615
11.11	1.71	8.41	19.505	12.73	—	6.12	5.14	21.99	45.215	5.19	314.68
38.70	4.26	12.00	77.65	29.69	—	7.43	11.62	32.40	70.00	27.556	647.719
33.48	7.30	22.78	17.26	19.16	—	15.57	11.85	125.13	—	5.00	2392.075
360.025	18.15	15.38	29.78	38.01	—	10.42	11.0	65.15	—	4.44	1362.77
76.85	14.24	16.57	39.14	45.21	0.15	21.85	12.91	53.68	78.20	2.00	886.69
78.45	16.50	29.01	26.61	49.85	—	28.51	16.6	112.17	—	15.73	1529.39
115.55	14.05	41.96	29.31	45.07	—	23.05	33.67	48.76	—	3.20	1063.225
80.38	20.84	24.98	32.02	35.59	—	27.30	18.22	29.61	—	3.80	714.28
149.86	18.08	43.45	37.18	53.26	0.73	42.83	21.35	72.39	—	2.15	1024.445
86.16	12.27	13.77	32.02	45.15	—	51.65	16.51	16.76	—	3.00	841.65
110.38	16.44	17.84	18.98	28.44	—	28.87	19.68	16.74	—	—	828.31
73.92	4.50	3.78	45.80	54.38	0.15	46.15	25.85	26.46	—	—	731.72
83.03	25.22	7.66	15.85	62.23	—	64.80	14.30	119.16	150.00	—	1043.30
57.45	17.72	8.90	14.23	40.24	0.95	43.35	26.79	9.36	—	0.73	649.35
65.61	40.19	5.29	22.60	43.45	0.55	29.89	7.95	7.688	—	2.00	58.978
51.11	3.95	9.30	20.70	27.20	—	23.95	11.45	16.11	8.45	2.20	501.48
39.98	3.74	8.74	15.63	36.68	1.45	40.50	18.58	23.22	4.75	3.13	551.70
78.80	13.30	3.15	18.73	49.85	—	39.60	28.45	110.97	4.55	6.05	752.78
109.57	22.24	13.10	17.52	34.65	—	41.35	12.37	26.72	—	0.55	655.35
129.85	10.66	6.18	21.96	44.87	—	46.70	14.31	101.95	268.95	5.10	1041.84
60.10	24.62	5.13	19.24	57.88	—	10.60	16.35	66.03	2.00	0.66	652.27
90.48	4.68	15.10	39.97	63.71	0.75	16.70	17.32	56.29	—	3.50	660.21
201.32	8.86	13.50	21.43	60.79	—	16.17	25.05	216.58	8.30	5.34	1032.46
60.15	22.20	31.20	24.22	87.39	—	31.98	8.80	69.96	8.87	1.25	596.95
66.79	20.00	40.16	34.04	100.25	—	17.20	32.15	214.54	115.30	0.10	1077.90
201.17	1.40	21.90	42.48	70.55	—	6.55	5.10	35.16	339.85	0.51	1025.84
143.17	2.45	17.13	52.90	67.40	—	5.80	6.42	86.15	—	5.00	656.38
152.96	1.60	18.78	33.41	116.00	—	7.80	13.20	104.16	—	2.96	668.64
145.90	23.00	43.66	117.01	103.60	—	—	14.00	324.91	—	9.80	1149.95
625.11	65.00	19.50	234.00	419.00	15.00	14.00	75.00	720.34	46.00	—	4608.95
893.00	276.20	206.00	755.35	695.80	—	54.00	270.00	1158.75	5.00	—	20194.68
3032.00	710.00	912.00	2383.00	2623.00	—	885.00	—	712.50	8300.00	—	41679.70
2019.30	600.	351.50	2841.	3481.	—	1240.	—	1869.	1440.	100.3	47033.45
5571.50	1940.	150.	3247.	6515.	—	1755.	—	3637.70	100.	201.0	56988.20
7473.	1310.	664.	3770.	4660.	—	2072.	—	4779.	4490.	—	65216.20
9918.	1270.	2239.	5336.	5850.5	—	1550.	510.	3883.	926.	80.	86642.50
11008.	890.	366.	8258.	10290.	—	2230.	—	9176.	1265.	—	117976.

第 2 表 費目別消費

時期区分	家族人員	常雇	社会のおもな出来事	社会のおもな出来事	可処分所得	家計費合計	食料費	住居費	光熱費
[1] 明治41～大正2	人 大人8 小供2	人 2	43. 帝国農会設立 2. 東北・北海道地方凶作	42. K氏2女出生 44. K氏弟他出 45. K氏長男出生	735.466	328.929 (100)	80.216 (24.4)	71.94 (21.9)	15.92 (4.8)
[2] 3～6	大人7 小供3	3	3. 第一次世界大戦に参戦 4. 戦争景気はじまる 6. 米価暴騰	3. K氏弟分家 4. K氏2男出生 5. S氏の妻死亡	608.625	298.413 (100)	63.882 (21.4)	44.11 (14.8)	16.84 (5.6)
[3] 7～11	大人5 小供2	2	7. 第一次大戦休戦米騒動 8. 戦後ブーム 9. 戦後恐慌 11. 日本農民組合結成	7. S氏死亡 K氏の2男死亡 10. K氏長女死亡	1665.365	1344.11 (100)	316.22 (23.5)	493.011 (36.7)	52.84 (3.9)
[4] 12～15	大人5 小供1	2	12. 関東大震災おこる		1271.938	909.78 (100)	232.607 (25.6)	128.05 (14.1)	56.46 (6.2)
[5] 昭和2～6	大人5	1	2. 金融恐慌 4. 世界恐慌はじまる 5. 昭和恐慌 米価，糸価大暴落物価下落 6. 満州事変・東北冷害	3. K氏の2女養出 6. K氏長男結婚	1247.722	760.29 (100)	204.742 (26.9)	81.92 (10.8)	31.95 (4.2)
[6] 7～11	大人6 小供1	1	7. 5.15事件 9. 大凶作 11. 2.26事件	7. 長男の長女出生 11. K氏長男死亡	887.47	701.21 (100)	184.88 (26.4)	60.57 (8.7)	49.84 (7.1)
[7] 12～16	大人5～2 小供1	1	12. 日中戦争勃発 13. 物資動員計画発足 国家総動員法公布 14. 米穀配給統制法 16. 大平洋戦争はじまる	12. 長男の妻離別 14. K氏の両親死亡	1458.31	813.14 (100)	210.27 (25.9)	60.69 (7.5)	39.93 (4.9)
[8] 17～20	大人2 小供1		17. 衣料切符制実施 20. 終戦		2197.406	873.81 (100)	127.93 (14.7)	47.70 (5.5)	35.30 (4.0)
[9] 21～24	大人3～4		21. 生産荒廃，インフレシーション高進，食料欠乏等国民生活の窮乏激化物価統制令公布 23. 農地改革強力実施 24. ドッチラインによる不況	23. K氏の孫結婚 24. 孫の長男出生	35270.85	27351.60 (100)	7366.50 (26.9)	3882.70 (14.2)	1132.10 (4.1)
[10] 25～28	大人3 小係2		25. 特需ブーム 経済統制撤廃 28. 朝鮮休戦協定調印	25. K氏の妻死亡 26. 孫の長女出生	64422.23	82112 (100)	18258 (22.2)	11826 (14.4)	3650 (4.5)

支　出　の　推　移

時期区分別平均額
単位円（ ）構成比%

被服費	保健衛生費	交通通信費	教育費	教養娯楽費	交際費	たばこ	こずかい	家事使用人費	雑費	臨時費	不明
66.77	9.462	0.932	19.096	11.761	14.214	0.042	7.76	7.923	15.202	3.879	3.812
(20.3)	(2.9)	(0.3)	(5.8)	(3.6)	(4.3)		(2.4)	(2.4)	(4.6)	(1.2)	(1.1)
44.50	10.773	2.08	14.08	11.195	10.719	—	10.034	9.812	18.498	39.03	2.83
(14.9)	(3.6)	(0.7)	(4.7)	(3.8)	(3.6)		(3.4)	(3.3)	(6.2)	(13.1)	(0.9)
130.59	117.50	12.09	19.15	38.09	36.38	0.03	16.76	12.80	77.71	14.00	4.96
(9.7)	(8.7)	(0.9)	(1.4)	(2.8)	(2.7)		(1.4)	(1.0)	(5.9)	(1.0)	(0.4)
156.48	107.99	16.31	31.04	32.63	44.77	0.18	36.21	21.88	42.133	—	3.04
(17.2)	(11.9)	(1.8)	(3.4)	(3.6)	(4.9)		(4.0)	(2.4)	(4.6)		(0.3)
136.64	78.10	20.81	8.69	23.49	45.75	0.33	42.61	18.91	35.878	30.0	0.47
(18.0)	(10.3)	(2.7)	(1.1)	(3.1)	(6.0)		(5.6)	(2.5)	(4.8)	(4.0)	
75.35	81.86	10.78	8.09	18.91	38.65	0.29	38.42	17.03	55.79	57.34	3.41
(10.8)	(11.7)	(1.5)	(1.2)	(2.7)	(5.5)		(5.5)	(2.4)	(7.9)	(8.2)	(0.4)
66.58	95.77	16.07	21.02	27.78	74.00	0.15	18.53	19.93	124.68	26.89	10.85
(8.2)	(11.8)	(2.0)	(2.6)	(3.4)	(9.1)		(2.3)	(2.5)	(15.3)	(3.3)	(1.2)
78.17	160.80	7.11	25.37	61.45	89.39	—	5.04	8.43	137.59	84.96	4.57
(9.0)	(18.4)	(0.8)	(2.9)	(7.0)	(10.2)		(0.6)	(1.0)	(15.7)	(9.7)	(0.5)
5783.4	1647.4	412.8	372.30	1553.3	1804.7	3.80	548.3	86.30	1115.2	1622.8	25.1
(21.1)	(6.0)	(1.5)	(1.4)	(5.7)	(6.7)		(2.0)	(0.3)	(4.1)	(5.9)	(0.1)
16129	8493	1353	855	5153	6829	—	1902	128	5369	945	70
(19.6)	(10.3)	(1.7)	(1.0)	(6.3)	(8.3)		(2.3)	(1.6)	(6.5)	(1.2)	(0.1)

の下落による農業所得の大巾な減少に対応した家計支出の縮小をものがたるものといえる。

戦時下〔7〕,〔8〕期の家計費はそれぞれ813.14円，873.81円を示し名目上戦前より若干増加している。戦争経済は，国民生活を破壊したが，農村においても軍隊への大動員，軍需工場へ流出などによる農業労働力の不足，肥料や農機具の不足等生産条件の悪化が重なり，農業生産は激減した。K家もこの例外ではなく所得は大正後期より実質的に大巾な低下を示している。一方K家の家族は昭和11年に長男が日中戦争下の14年に父母と相ついで死亡し，また長男の嫁も12年に婚家を去り，残されたのはK氏夫妻と孫のみになり，家族は半数に減少したので家計費は当然低下を示している。名目家計費の増加はもとより戦時インフレの進行を反映したものといえる。

戦後〔9〕期は，名目家計費が27351.6円で戦前〔6〕期（昭和7年～11年）の約40倍の金額を示している。しかし当時のインフレはかつてみない激しさで進んだことは周知のことで，物価指数は昭和21年は戦前基準（昭和9年～11年）の47倍，23年は203倍，24年は256倍に上昇している。こうした物価の上昇を勘案すれば家計費の実質低下は明白である。昭和23年にK氏は孫にむこ養子を迎え，労働力の補充によって自作中堅農家として歩みだし〔10〕期は家計費が〔9〕期の3倍の伸びを示している。

2　家計費の配分構造

家計費の費目別構成比の経時的推移は第3表に示した。費目別の支出内容については次章において詳述する。

家計費の配分構造を第2図によってみると，戦前（〔1〕期～〔6〕期），戦中（〔7〕〔8〕期），戦後（〔9〕〔10〕期）とそれぞれ異なったパターンが見られる。しかし，戦前は〔1〕期から〔6〕期まで一定の配分構造を示しているのではない。ここには明治後期の大農から〔6〕期の自作零細農に衰退するに至るK家の経営の展開をそれぞれ反映した配分構造の推移がみられる。中でも基礎生活費の比率配分の変化が著しく，〔1〕期と〔3〕期は最も高率で71%強を占めるが，〔4〕期以降は63%から〔6〕期の53%まで段階的に比率が低下している。〔2〕期は臨時支出の増大が基礎生活費の比率低下を招き56.7%を示している。すなわち〔2〕期は先に述べたK家の特殊事情により〔1〕〔3〕期とは若干異なるパターンがみられる。

戦後の基礎生活費は60～66%を占め，戦前〔3〕〔4〕期（大正7年～大正15年）とほゞ同率である。内訳をみると食料費は戦前，戦後とも21～27%を占め比率はほゞ同じである。その中で所得の低下した農業恐慌期の〔5〕〔6〕期およびインフレ下の終戦直後にあたる〔9〕期は約27%と高い比率を示している。

被服費は〔1〕〔3〕期を例外にすべての時期住居費より高率を示し，〔1〕期，〔9〕期の20%台を最高に戦時下は8～9%に低下するが，概して高い比率を示している。

住居費についてみると，〔1〕期と〔3〕期は戦前期間中でも比率が高い時期であるが，とくに〔3〕期は食料費の23.5%をしのぎ家計費の実に37%の高比率を示している。これは大正8年に土蔵を建築したいわば臨時的な支出が原因である。

配分構造をK家の経営の展開と対応させてみると，明治後期に当たる〔1〕期は6人の家族労働力に年雇を加え，米生産，養蚕，製紙を基盤とする自作地主経営の確立期であり，土地の拡大と生産力の増強をはかり大農としての地位が安定してくる。しかし〔2〕期は中心的労働力であった弟の分家に伴う土地分与によって農地は縮少し，所得水準の低下をきたした。〔1〕〔2〕期の配分構造は，基礎生活費の占める比率が約70%と圧倒的に高いことが特徴的である。こ

れは12人の大家族によるものであるが，消費生活のレベルはそれ程高いとはいいにくい。

〔3〕期は第一次大戦後の好況下，米価，まゆ価の高騰に支えられ〔1〕期の2.3倍の農業所得が得られた。農村は当時黄金時代を迎えて，地主の手作り化を生み，米価の急激な上昇を基軸とした農産物価格の騰貴が，手作り地主の収入をふやし蓄積をも可能にした。それは農業における資本主義的経営に向けての前進であったが，米騒動とそれに続く戦後恐慌によってあえなく摘みとられてしまった[4]。前報で記述したようにK家もこの時期株に投資をし蓄財をはかろうとしたが，大正9年恐慌の開始とともに，いっきょにその富を失っていく。ともあれ大戦をめぐる好況が農村を潤し，未曽有の繁栄を招来したと云われる。K家は大正8〜9年に土蔵の新築を行ない屋敷構えを立派にとゝのえた。〔3〕〔4〕期は基礎的生活費と共に教育，教養，交際にも意を用い全期間を通じ最も高い消費生活を示す配分構造がみられる。

昭和戦前の〔5〕〔6〕期は，大正末期の慢性的不況につゞき昭和初期の農業恐慌の時期である。この間わずかの土地売却や経営の多角化によって不況をきりぬけることはできたのである。一方家族構成は，長女の死亡，二女の養出で〔5〕期は5人に減少したが，昭和6年長男に嫁を迎えた。〔6〕期は長男，K氏，父Y氏の三世代夫婦と孫の7人になった。しかし老父母の引退によって実際の労働力は長男夫婦とK氏の妻となり，養蚕を中心とする畑耕作にたよって自作経営を維持した。反面1町7反余の田は貸付け，小作米を得る寄生地主的な側面をもった。この間所得水準の低下に対応して家計費も低落した。こうした家族周期を反映して被服費の比率が18%と高いことが目立つが，基礎生活費は最低限に切りつめられ，他の費目も支出は少ない。この期は生活の縮小を余儀なくされた配分構造を示すものと思われる。

戦時下に当たる〔7〕〔8〕期は全くK家の特殊事情による配分構造であり，特に〔8〕期は家計のピンチともいうべきパターンを示している。昭和11年に後継ぎの長男が死亡し，妻は幼い子供を残して家を去り，つゞいて14年父母が死亡するなど戦時体制下に一挙に労働力を失うことになった。その結果養蚕，製紙は全く中止され，自作地の縮小をも余儀なくされたのである。K氏夫妻と孫の生活が雇用労働力に依存しながら自給を若干上回わる耕作によって支えられていた。加えて現物小作料は金納になりもはや地主的な有利性は失なわれ，一方インフレの進行のなかでK家の所得水準は実質低下をきたした[5]。この時期の基礎生活費の比率は，戦前期間中最低であった〔6〕期の53%より更に低い46.5%に下り，太平洋戦争下の〔8〕期は33.2%と最低を示す。これは日中戦争直前〔6〕期の三分の二にもおよばない。

K家は保健衛生費が概して高率であることも特徴的である。特に戦時体制下家計費が縮小されている中で〔7〕期は11.8%，〔8〕期は18.4%と食費に次いで高率を示す。〔7〕期は父母の病気の治療費がかさんだためであるが，〔8〕期は国民健康保健料が保健衛生費の半ばちかい支出額を占め，それによって比率が高められたのである。

交際費は特に〔7〕〔8〕期が9.1%，10.2%と高く，保健衛生費の次に多い。これはK家が古くは大農として隆盛を誇っていた部落内における地位，有識者というK氏個人に対する村人の信望があつく，つきあいが広がった。加えて軍事関係や公共的な寄附行為がかなりみられたからである。〔8〕期は統制経済下にあって現金支出は少なかったが医療費の増大や対外的な支出は家計に大きな影響を与え老夫婦と孫の生活は最低にきりつめられたのである。

戦後の農家経済は周知の通り，地主制度の大改革が行なわれ，全国小作地の81%の農耕地，

---

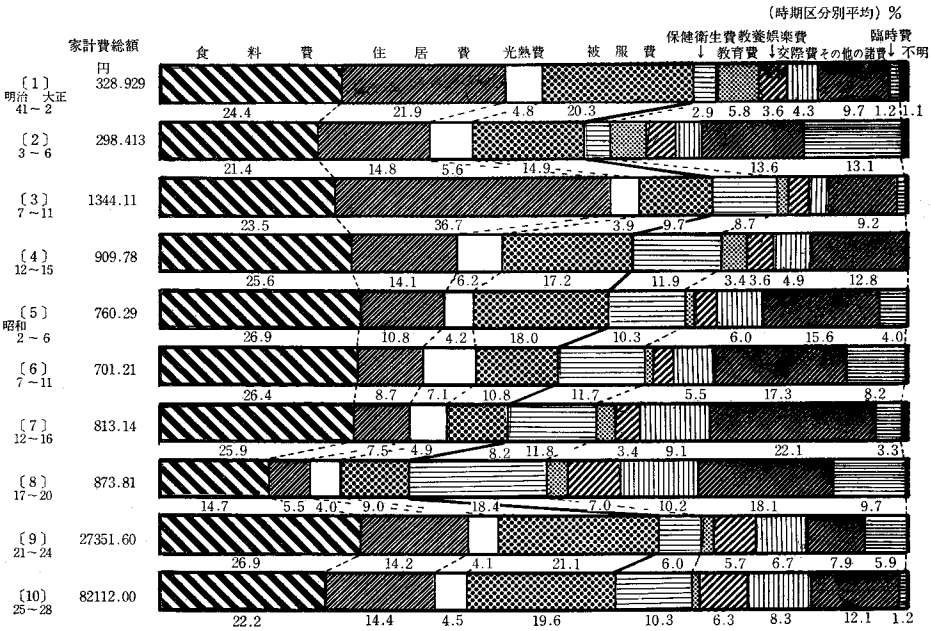
4)　梅津和郎：教育社歴史新書　第一次世界大戦と日本　60（1978）
5)　前掲 1）と同じ　102

第 3 表 年度別消費

年次＼費目	家計費	食料費					食料費小計	住民費		家計・光熱費
		主食	副食	調味料	嗜好品	商店払		住宅修繕	家財家具	
明治41	100	—	2.1	2.5	15.1	4.9	24.6	10.8	9.7	4.1
42	100	0.1	4.3	5.1	8.8	0.8	19.1	12.5	6.4	3.5
44	100	0.1	2.5	4.5	7.1	4.4	18.6	15.5	11.7	3.4
大正 1	100	2.5	5.5	7.4	4.3	11.2	30.6	11.7	5.0	9.7
2	100	0.3	8.6	3.0	11.3	7.2	30.4	21.0	3.3	4.9
3	100	0.3	3.3	4.6	4.0	5.9	18.2	4.7	5.2	5.2
4	100	0.5	4.0	4.7	4.5	14.6	28.3	18.0	5.8	4.0
5	100	0.3	4.1	4.3	5.9	6.4	20.9	15.4	4.9	1.8
6	100	0.2	4.6	3.9	3.6	15.5	17.9	4.0	2.2	10.6
7	100	0.1	4.1	1.7	3.0	2.9	11.8	14.3	1.7	12.5
8	100	0.1	1.7	1.5	2.2	2.5	8.0	70.8	0.7	2.8
9	100	0.1	3.9	1.8	2.2	9.3	17.3	28.6	1.5	1.8
10	100	0.1	5.0	2.8	3.4	9.1	20.5	7.6	12.6	3.8
11	100	0.6	3.8	1.7	1.7	50.7	58.5	2.0	1.9	3.8
12	100	0.3	5.2	2.1	3.0	11.2	21.8	0.6	23.3	6.7
13	100	0.6	8.1	3.1	3.2	12.0	27.0	0.1	2.0	8.4
14	100	0.5	5.3	2.1	3.6	12.6	24.1	12.6	5.0	3.5
15	100	0.7	6.7	4.4	4.1	15.1	31.0	5.5	1.6	6.9
昭和 2	100	0.5	6.6	2.7	3.9	15.1	28.8	15.7	1.1	5.6
3	100	0.7	6.2	3.2	6.4	13.7	30.2	6.5	4.1	4.1
4	100	0.4	5.6	1.8	2.9	11.6	22.2	6.4	2.0	1.6
5	100	0.2	10.5	2.8	3.5	14.0	31.0	2.9	2.5	6.5
6	100	0.7	5.5	1.9	4.8	11.0	24.0	11.5	1.4	4.5
7	100	0.4	5.5	2.8	5.3	11.5	25.4	10.8	5.8	8.0
8	100	0.8	8.8	3.4	5.4	13.4	31.7	2.7	3.3	10.6
9	100	2.6	5.7	3.1	4.7	11.3	27.3	8.2	1.0	7.1
10	100	0.2	3.9	1.8	4.0	19.6	29.5	7.5	2.1	6.9
11	100	1.5	3.6	2.1	3.0	11.1	21.2	3.8	1.3	4.9
12	100	0.8	6.8	1.5	6.4	15.8	31.2	8.6	3.3	7.1
13	100	0.4	7.3	4.3	7.2	10.3	29.5	0.8	1.6	8.7
14	100	0.3	5.3	2.7	5.3	12.5	26.1	3.1	2.2	3.9
15	100	0.5	9.3	1.7	12.5	8.2	32.1	0.8	1.9	2.7
16	100	0.3	7.2	2.5	7.6	—	17.6	10.8	2.2	3.7
17	100	0.3	4.2	1.7	5.3	1.5	11.9	6.6	1.4	2.5
18	100	—	4.1	2.5	8.1	—	14.7	3.5	1.4	2.5
19	100	0.5	3.6	3.2	6.0	—	13.3	3.0	1.8	7.9
20	100	1.2	7.5	1.4	7.6	—	17.7	2.2	1.7	4.1
21	100	3.1	7.7	5.6	10.1	—	26.5	4.6	6.3	1.4
22	100	0.1	27.2	8.0	16.7	—	52.0	0.1	1.2	1.7
23	100	—	5.3	3.5	5.8	—	14.6	3.0	1.9	5.8
24	100	0.3	7.3	6.1	12.8	—	26.5	25.1	1.9	3.7
25	100	1.4	6.7	9.0	12.9	—	30.0	5.2	2.3	3.5
26	100	0.9	5.3	5.6	7.4	—	19.2	11.1	2.8	3.8
27	100	0.6	4.8	8.9	9.2	—	23.5	9.7	6.8	6.1
28	100	0.9	5.0	5.4	8.2	—	19.5	13.8	2.8	4.1

支　出　構　成　比　(%)

被服費	保健衛生費	交通通信費	教育費	教養娯楽費	交際費	たばこ	こずかい	家事使用人費	雑費	臨時費	不明金
21.9	4.7	0.3	7.3	1.3	7.2	—	2.2	1.4	3.3	—	1.2
21.6	2.0	0.4	10.8	3.6	2.2	0.1	5.0	2.3	9.3	—	1.2
19.1	2.9	0.5	9.5	5.2	4.1	—	2.3	1.4	0.6	5.0	0.2
22.5	4.1	0.1	0.1	2.6	6.4	—	0.6	3.0	2.1	—	1.5
16.2	1.3	0.1	0.8	4.4	2.5	—	1.6	3.8	8.0	—	2.5
8.8	4.1	1.1	0.2	2.6	3.3	—	3.0	6.4	7.4	28.6	1.2
11.4	3.8	0.5	15.1	1.1	1.6	—	2.6	2.7	4.3	—	0.8
22.0	2.6	0.5	1.3	4.9	5.3	—	6.1	1.7	5.8	5.5	1.3
21.9	3.5	0.5	2.7	6.2	4.1	—	1.9	1.6	6.9	14.4	1.6
11.6	6.0	0.7	1.9	12.0	4.6	—	1.2	1.8	4.8	10.8	4.3
6.9	1.4	0.3	1.0	0.7	0.8	—	0.7	0.5	5.2	—	0.2
10.2	26.4	1.3	1.1	2.2	2.8	—	0.8	0.8	4.9	—	0.3
14.8	8.7	1.6	1.9	4.4	5.1	—	2.5	1.5	6.0	8.8	0.2
9.3	5.1	1.1	1.9	1.7	3.3	—	1.9	1.1	7.4	—	1.0
14.2	10.9	1.3	4.0	2.8	4.2	—	2.2	3.2	4.5	—	0.3
24.3	11.3	2.9	3.5	4.5	5.0	—	3.8	2.5	4.2	—	0.5
11.4	14.6	1.8	4.2	3.6	5.2	0.1	4.2	2.1	7.1	—	0.2
22.0	10.2	1.5	1.6	3.8	5.4	—	6.1	2.0	2.0	—	0.4
17.7	13.3	2.0	2.2	2.3	3.4	—	3.5	2.4	2.0	—	—
16.7	10.1	0.6	0.5	6.3	7.4	—	6.3	3.5	3.7	—	—
16.0	8.0	2.4	0.7	1.5	6.0	—	6.2	1.4	11.2	14.4	—
23.3	8.9	2.7	1.4	2.2	6.2	0.2	6.7	4.1	1.3	—	0.1
17.6	12.0	7.3	1.0	4.1	7.9	0.1	5.4	1.5	1.3	—	0.4
15.2	10.2	0.8	1.9	4.1	5.4	—	4.8	2.3	3.2	1.7	0.4
16.2	7.3	0.7	1.6	2.8	6.7	0.3	7.3	3.4	3.9	0.9	0.6
9.4	10.5	1.8	0.4	2.5	6.6	—	5.3	3.8	14.7	0.6	0.8
11.5	16.7	3.4	2.0	2.7	5.3	—	6.3	1.9	4.1	—	0.1
6.3	12.5	1.0	0.6	2.1	4.3	—	4.5	1.4	9.8	25.8	0.5
9.6	9.2	3.8	0.8	2.9	8.9	—	1.6	2.5	10.1	0.3	0.1
12.7	13.7	0.7	2.3	6.0	9.6	0.1	2.5	2.6	8.7	—	0.5
8.9	19.5	0.9	1.3	2.1	5.9	—	1.6	2.4	20.8	0.8	0.5
4.5	10.1	3.7	5.2	4.1	14.6	—	5.4	1.5	11.7	1.5	0.2
6.3	6.2	1.9	3.7	3.2	9.3	—	1.6	3.0	19.9	10.7	—
7.0	19.6	0.1	2.1	4.1	6.9	—	0.6	0.5	3.5	33.1	0.1
19.0	21.8	0.4	2.6	8.1	10.3	—	0.9	1.0	13.1	—	0.8
6.6	22.9	0.2	2.8	5.0	17.4	—	1.2	2.0	15.6	—	0.4
6.3	12.7	2.0	3.8	10.2	9.0	—	—	1.2	28.3	—	0.8
12.7	13.6	1.4	0.4	5.1	9.1	0.3	0.3	1.6	15.6	1.0	—
23.6	4.4	1.4	1.0	3.7	3.5	—	0.3	1.3	5.7	—	—
27.8	7.3	1.7	2.2	5.7	6.3	—	2.1	—	1.7	19.9	—
13.2	4.3	1.3	0.7	6.0	7.4	—	2.6	—	4.0	3.1	0.2
18.5	9.8	3.4	0.3	5.7	11.4	—	3.1	—	6.4	0.2	0.3
18.3	11.5	2.0	1.0	5.8	7.2	—	3.2	—	7.3	6.9	—
17.4	11.5	1.5	2.6	6.2	6.7	—	1.8	0.6	4.5	1.1	—
22.9	9.3	0.8	0.3	7.0	8.7	—	1.9	—	7.8	1.1	—



第2図 消費支出配分構造の推移

牧野が解放され農民の殆んどが農地の所有者となった。この改革は一般農家の農業所得を引き上げ，農家の生産意欲を高め，土地改良の促進と農業投資の増大を実現していくうえに寄与した[6)]。K家は農地解放によって3町余の貸付地が半減し，わずかの自作地の農業生産物と若干の金納小作料とによって3人の生活が維持されてきた。

戦後，日本の経済復興がよくやく黎明期にさしかゝった昭和23年に孫にむこ養子を迎え，養鶏，畑作，果樹を主体とした自作農経営の再編をめざした。〔9〕〔10〕期は戦争から終戦直後の経済的危機を脱し，消費水準の回復期を示す配分構造といえる。基礎生活費は60～66%と〔1〕〔2〕期とほゞ同じ水準となり〔10〕期は教養娯楽および交際費の比率も高くなっている。

3 消費生活構造の展開

以上消費構造の推移を概観したが，本章では費目別に生活財の種類および消費量の実態を読みとりながら，家庭経営の変容をみていくことにする。

1) 食生活の経営

(1) 食料費および食品群別構成比の推移

こゝで取上げる食料費は飯米および自給野菜は含まず購入食品の支出に限られる。K家の食料費を第2表によって時期区分別にみると〔1〕期は80.216円の支出であるが，〔2〕期は63.882円と若干減少を示す。これは大人が減って子供の出生という家族構成の変化によるものであるが，加えて所得の低下に対応した切りつめの結果とも思われる。大正中期に当たる〔3〕期は一躍316.22円と〔1〕期のほゞ4倍に及ぶ伸びを示し戦前戦中を通じ最大の支出額を示している。もとよりこれは第一次大戦による物価の高騰が大きく作用している点を見逃がすことはできない。〔4〕〔5〕期は200円代となり〔6〕期以降終戦の〔8〕期まで漸減を示し，〔8〕期は昭和初期

6) 内野達郎： 戦後日本経済史 講談社 31-32 (1978)

〔5〕期の約 60% に当たる 127.93 円におちこんでいる。こうした食料費の支出変動は，大正から昭和に至る大きな社会経済的な変動に伴なうK家の所得の変化と家族周期による影響を表わしたものである。

家計費中に占める食料費の比率をみると，戦時下〔8〕期の 14.7% を例外に各時期とも大差なく 21.5〜27% を示している。傾向として経済的にも安定し，生活が充実していたと思われる明治後期から大正中期（〔1〕期〜〔3〕期）までは概して食料費の比率が低い。

食料費の内容を主食，副食，調味料，嗜好品に4分類した時期区分別の推移を第4表に示した。表中の「商店払い」は食料品の掛買いの支払いであるが，聞きとりによると掛買いの大方は酒代であったといわれる。買入れ先はK氏の兄弟の店で日用雑貨のほかにしょう油，酒，砂糖等を商っていた。

食料費の中では嗜好品の支出が多いことが目立つ。〔1〕期は 29.87 円支出され食料費の 37.3% を占め戦前期間中最も比率が高い。商店の掛買い払いが全て酒代と仮定すれば嗜好品の支出は更に多額となり，多い時は食料費の 77% におよぶ。戦後は 40% 代に低下してはいるものの嗜好品が食料費のなかば以上を占めることは異例であろう。聞きとりによるとK氏と母親は飲酒家で，2人で約5合の晩酌を欠かすことがなかったといわれている。明治 42 年の例をみると嗜好品の支出 28.6 円の中 23.37 円が酒代であり，記録から推計して約 60 升にあたる。これに商店払いをも含めて計算すると年間 80〜90 本の酒を購入したことになる。

第4表　食料費の項目別支出

時期区分別平均額
単位円，( )構成比%

時期区分＼項目	主食	副食	調味料	嗜好品	商店払い	食料費合計
[1] 明治 大正 41〜2 年	1.83 (2.3)	15.32 (19.1)	14.72 (18.3)	29.89 (37.3)	18.456 (23.0)	80.216 (100)
[2] 3 〜 6	1.02 (1.6)	12.08 (18.9)	13.19 (20.6)	13.47 (21.1)	24.122 (37.8)	63.882 (100)
[3[7 〜 11	2.99 (0.9)	44.60 (14.1)	24.37 (7.7)	31.80 (10.1)	212.46 (67.2)	316.22 (100)
[4] 12 〜 15	4.69 (2.0)	55.86 (24.0)	25.74 (11.1)	30.87 (13.3)	115.447 (49.6)	232.607 (100)
[5] 昭和 2 〜 6	3.65 (1.8)	51.46 (25.1)	18.57 (9.1)	31.80 (15.5)	99.262 (48.5)	204.742 (100)
[6] 7 〜 11	8.48 (4.6)	36.21 (19.6)	18.48 (10.0)	29.77 (16.1)	91.94 (49.7)	184.88 (100)
[7) 12 〜 16	3.34 (1.6)	56.07 (26.7)	21.13 (10.1)	60.14 (28.6)	69.59 (33.0)	210.27 (100)
[8] 17 〜 20	4.96 (3.9)	44.82 (35.0)	17.76 (13.9)	60.39 (47.2)	—	127.93 (100)
[9] 21 〜 24	45.73 (0.6)	2863.84 (38.9)	1549.58 (21.0)	2907.3 (39.5)	—	7366.5 (100)
[10] 25 〜 28	722.0 (3.9)	4326.25 (23.7)	5724.6 (31.4)	7485.0 (41.0)	—	18258. (100)

副食費は〔1〕期 15.32 円が支出され〔2〕期以降増減を示している。戦前期間中支出額の多いのは〔4〕〔5〕期（大正12年～昭和6年）で約 51～56 円の支出である。〔6〕期以降は支出の実質低下がみられる。副食費の比率は戦前は 14～25% を示し，戦中戦後は約 25～38% と高率になっている。もとよりこれは自給度の減少に伴なう購入食品の増加が食料費の低下のために高く示されたものと考えてよい。

調味料の支出は〔1〕期に 14.72 円で副食費より若干少ない。〔2〕期以降支出の増減傾向は副

第5表 食品群別食料費の推移

時期区分別平均額
（単位 円）

食品別＼時期区分	[1] 明治41～大正2	[2] 3～6	[3] 7～11	[4] 12～15	[5] 昭和2～6	[6] 7～11	[7] 12～16	[8] 17～20	[9] 21～24	[10] 25～28
主食	1.83	1.02	2.99	4.69	3.65	8.48	3.34	4.96	45.73	722.
米・麦	0.02	—	1.11	—	0.26	6.02	0.77	2.88	35.73	—
麺類	0.13	0.11	0.46	2.43	2.31	0.99	0.97	0.66	—	487.
その他	1.68	0.91	1.42	2.26	1.08	1.47	1.60	1.42	10.00	235.
副食	15.32	12.08	44.60	55.86	51.46	36.21	56.07	44.82	2863.84	4326.25
野菜	1.90	1.45	2.69	3.65	2.40	2.03	4.60	—	4.25	15.00
魚	11.56	8.85	32.84	42.67	38.77	27.67	40.71	33.84	2692.87	3605.75
肉	0.05	0.11	0.88	0.28	0.16	—	0.15	—	—	—
豆製品	0.73	1.14	3.89	2.45	2.34	1.86	3.33	0.34	117.76	301.75
卵	0.31	0.30	3.53	4.22	5.19	2.85	3.96	0.16	—	—
海藻	0.12	0.17	0.18	0.65	0.42	0.62	0.48	3.08	7.28	105.00
その他	0.65	0.06	0.59	1.94	2.18	1.18	2.84	7.40	41.68	298.75
調味料	14.72	13.19	24.37	25.74	18.57	18.48	21.13	17.76	1549.58	5724.60
塩	8.28	6.10	7.99	6.23	5.08	6.04	4.30	1.85	618.80	1073.70
みそ	—	0.11	—	0.06	0.25	—	0.18	—	—	—
しようゆ	1.08	2.67	6.62	7.55	6.10	1.58	4.62	7.93	391.20	2323.50
砂糖	2.47	1.89	5.52	6.77	3.04	3.56	5.81	2.57	167.00	1586.80
酢	0.42	0.63	1.74	1.49	0.89	0.95	0.94	0.98	63.90	78.00
食用油	0.77	0.75	0.95	0.77	1.29	2.26	3.26	2.53	49.98	213.70
その他	1.68	1.15	1.55	2.87	1.92	4.09	2.02	1.90	258.70	448.70
嗜好品	29.89	13.47	31.80	30.87	31.80	29.77	60.14	60.39	2907.30	7485
菓子	0.88	1.61	2.41	2.00	2.83	4.26	3.88	1.55	28.50	685.50
果物	2.96	0.35	1.89	3.80	2.40	2.98	6.63	4.29	172.70	441.
茶	1.57	2.20	2.69	2.28	2.30	1.94	4.25	10.80	792.80	1132.50
酒	23.37	8.37	20.95	19.71	24.05	19.47	44.48	31.66	1892.12	5133.
飲物	—	—	0.79	1.78	—	0.73	0.54	9.73	99.48	80.25
牛乳	0.57	0.69	1.96	0.69	—	—	—	—	—	10.50
その他	0.54	0.25	1.11	3.01	0.22	0.39	0.36	2.36	94.40	—
商店掛買払	18.456	24.122	212.46	115.447	99.262	91.94	69.59	—	—	—
食料費合計	80.216	63.882	316.22	232.607	204.742	184.88	210.27	127.93	7366.50	18258.
食料費/家計費	24.4	21.4	23.5	25.6	26.9	26.4	25.9	14.7	26.9	22.2

食費と同様である。比率からみれば昭和初期の〔5〕期以降 9～14% と低く，戦後は 21～31% とはるかに高い。

(2)　食料費からみた食生活経営の変容

4分類した食料費を更に食品別にその推移を示したのが第5表である。購入食品の推移に表われたK家の食生活経営の変容を検討する。

①　主　食

K家は米作を基本とする自作農家であるから飯米はもとより自給がたてまえであり，〔9〕期を除き米は全く買われていない。〔9〕期は例外として終戦の20年と21年に配給米が買われている。この時期は前述のように雇用労働力によるわずかの畑耕作と金納小作料によって生計を維持していた。したがって配給米を購入しなければならなかった最悪の時代であった。

戦後30年頃まで主食は大麦・雑穀を混入した「かて飯」であり，大麦は大体自給されたことが記録から知れる。しかし東北大凶作の年であった昭和9年および翌10年は年に 2～3 俵の大麦を買い求めている。他に小麦，そばが全期間を通じて自作されたことが挽賃，打賃の記録から知られる。うどんの依託加工賃も多くみられ，また製品としてそうめん，うどんがよく買われている。聞きとりによると雇人や家族の多かった戦前は，米をできるだけうかせるため「かいもち」[7]，「ごっぱ餅」[8] を常時昼食やおやつに食したと云われるが，雑穀類の補食によって米の備蓄や換金化に対する配慮を怠らなかった様子がうかがわれる。

②　副　食

自給野菜の種類および数量については記録がないので不明である。購入野菜はさつまいも，玉菜，ごぼう，うりなど数種に限られる。支出額も時期別平均で戦前は 2～3 円，戦中，戦後は約4円程度であるが，物価騰貴を勘案すれば自給依存が高くなっていたと思われる。第二次大戦下の〔8〕期は野菜の購入は全くみられない。これは家族が3人であり自給されていたからである。戦後もわらび，せり，夕顔の購入が散見されるにすぎない。

副食の中では魚類の購入が主体をなす。戦前では〔3〕期から〔5〕期（大正中期～昭和初期）が購入頻度も高く，支出額は 32～42 円位で概して多い。その種類はしゃけ，いわし，さば，かき，ます，めぬけ，かれい等の生魚をはじめなまり，切焼等の貯蔵性のある魚等多種類にわたって求められている。明治，大正時代東北の一般農家では日常の蛋白源は自給的なとうふ，卵等を食し生魚の類は毎日買えるものではなかった[9]。K家では明治後期〔1〕期にも生魚を相当買求めており，副食費 15 円中 11.5 円が魚代である。大正時代は殆んど毎日といってよい程支出が記録され，魚類の消費はかなり多いことがわかる。魚の購入もその時々の経済力や家族の変化に伴なって，きりつめや買いびかえの配慮がなされたことが明らかである。すなわち農業恐慌の深刻な時期にあたる〔6〕期は 27.67 円で前期の三分の二に低下し，特に昭和10年は 18 円と最低の支出を示し，前年の凶作の影響から買いびかえがなされている。また物資統制下の戦中から戦後は配給魚の購入にとゞまっている。

他に動物蛋白源として，牛肉を明治 42 年に買い求めている。その他まれにではあるが，とり肉，うさぎ肉，くじら肉も買われている。これらは当時農家にとってはぜいたく品であり，宗教的な禁忌から敬遠されていたがK家では肉類も早くから消費されている。

---

7)　そば粉を団子にし納豆，くるみ，ごまをまぶして食する。

8)　くだけ米にもち米を混入しごぼう葉を入れてついた餅。

9)　日本家政学会東北・北海道支部家政学総合研究会生活史班：家庭経営の変動に関する生活史的研究　第二報　162（1975）

卵は戦時中まで継続して購入されているが，昭和戦前期は頻度，量ともに高い。病人用に購入した卵は別途衛生費として記載されていることから家族が日常食したものと思われる。

その他とうふ，納豆，油揚，海藻，魚の缶詰もよく求められており，購入食品からみる限りにおいては食生活のレベルがかなり高かったことが察知される。K氏の子供等が虚弱体質で幼児期に死亡したり，成人に達した長男もとかく身体が弱かったことから，健康管理に対する配慮とも思われる。しかし聞きとりによると家族の食生活は至って質素で生魚は日常殆んど食べることがなかった。これらの食品はすべてにぜいたくで，わがまゝを通したK氏の母親が好んで買ったもので，1人でうまい物を食したともいわれている。

③　調味料

農家における砂糖の消費の歴史[10]からみて，大正初期貴重品であった砂糖も明治後期から求められている。砂糖の種類，購入量の正確な記録はないが，明治44年頃白砂糖1斤20銭位であり，2.4円の支出がなされているから12斤の砂糖が買われたことがわかる。支出の多い年は子供の出生るあいは死亡した年に当たっていることが多く，おそらく引出物として購入された贈答用が含まれているものと思える。

明治大正時代には農家の食生活において，みそ汁は農耕労働の活力源であって，みそは殆んど自家製で裕福な家ほど貯えが多かった。K家もみそは自家製であった。塩の購入状況をみると俵や叺買いの他に小口買いもされ，支出額は〔1〕期が8.28円で最も多く〔2〕期以降は若干の増減はあるが減少の傾向を示している。正確な購入量は不明であるが，明治後期に記録から知れる1俵の価格1.35円から推計すると〔1〕期は年平均5〜6俵の塩が購入されたとみられる。塩の農家一世帯年間使用量の調査[11]からみて「2年に10俵（岩手県附馬牛），6人家族で2斗入叺1ツ半（岩手県船越）」かなり多い方である。もちろんみそ以外に漬物用，家畜用，買いおきもあったが相当大量のみそ，しょうゆを仕込んだと思われる。

しょうゆの自家製は昭和9年頃までと思われ，11年以降は毎月購入されている。自家製であった時期も年に1〜2度は買われているが，これもK氏の母親が上たまり（市販しょうゆ）でないと食べなかったので母用に買い求めたと云うことである。

その他食用油，酢，だし用のかつを節等も日常使用され，また高級調味料ともいえる「みりん」が大正中期に購入され，正月の料理用に使用したことがよみとられる。

カレー粉，片栗粉の購入は戦後になってみられる。戦後特記すべき変化は，昭和26年以降食用油の購入がなくなり油〆賃の記録がみられることである。自作の大豆，菜種の依託加工によって自給をはかったことが知られる。

④　嗜好品

K家の食費の特徴は嗜好品費の比率が高く，その中で酒代が著しく多いことは前に述べた。その酒代が嗜好品の70%以上時には90%に及んでおり，更に掛買いをも加えるとかなりの酒量となる。

ついでお茶代の支出が多く，〔1〕期は1.57円で年に4回位の購入であるが，〔2〕期以降は殆んど毎月買われており，各時期の平均支出額は2〜2.5円前後である。K家は明治の頃から茶を飲用したわけであるが，茶の流布について書かれた[12]ものによると一般の農家で茶を飲むよ

10)　西岡虎之助：民衆生活史研究　福村書店　56 (1949)
11)　清川清子：食生活の歴史　講談社　112 (1970)
12)　前掲 11) と同じ　130

うになったのは大正時代になってからでそれも麦茶が多い地方（秋田県奥北浦）もあり，一般に東北地方の村は喫茶の風がおくれて流行したとある。K家が篤農家といわれ村の上層にあって種々の相談や依頼事に村人の出入が多かったことは想像されるが，接待用が含まれるにしても，それを可能にした経済的余裕があったからであろう。また茶請けに菓子が食べられたことが，「茶菓子」の記載が多くみられることから知られる。

果物では，寒冷地で栽培不能なみかんがよく購入され，他にぶどう，夏みかん，バナナが大正10年以降買われている。今日山形名産として名高い桜桃，柿は栽培され，大正中期以降は商品として販売もし所得の一部でもあった。戦時中の〔7〕期は支出額6.63円で2〜3円位であった他の時期に比較して特に多い。これは単にインフレによるものではなく，パイナップル，ぶどう，すいか，桃等を老衰で臥床中であった母に買い与えたものであり，食べたいものを箱入で買い床のそばにおいておき，K氏は母の意にさからわず孝養をつくしたと言うことである。

以上購入食品の推移をみると，その種類は時期により若干の消長はみとめられるが，明治後期から戦後に至るまで大きな変化はみられない。第4表に示した項目別の支出について推移の傾向をみると，大体の傾向として大正初期〔2〕期が最も少なく，中期〔3〕期，後期〔4〕期をピークに，昭和にはいり若干低下して終戦までほゞ横ばいを示している。〔1〕期と比較して戦後支出の伸びの大きいのは主食と調味料であるが，穀類やみそ，しょうゆの自給度の減少によるものと思われる。反面戦後の所得水準の低下が副食および嗜好品の支出をおさえた影響を見逃せない。

農村の食生活は日常の食事と「ハレ」の食事の二側面をもち，とくに婚礼または節日にそれが発揮され多額の費用をかける習慣がみられるのが特徴とも云われる。その面からK家の家族周期と食料費の関係をみると，明治後期から大正時代は父の代の子女独立期と，K氏の子女養育期から学校教育期との重なりの時期である。この間第1図に示すように明治42年から出生，むこ入，分家，死亡等が2年から3年おきに続いている。こうした事情から派生する誕生祝，葬式等のあった年に必ずしも食料費の増加を示していない。誕生した年に若干魚類の支出が多くなっている程度である。

長男が結婚した昭和6年はK家にとって最大の祝事が行われたと思われるが，この年の食料費は131.77円でこの時期の平均額204.74円より少ない。また臨時費も記載されていない。昭和6年は農村恐慌の最も深刻な時期にあたり意識的にごく控えめな祝事が行なわれたものか，あるいは記載もれか不明である。

ともあれK家の食生活は魚類や嗜好品の消費支出が多いこと，多様な食品の購入からみてレベルの高さを示すものといえよう。とくに大正年間の中期は購入食品の量的増加が著しく食料の自給面とあわせ高い水準を示していることが察知される。

2)　衣生活の経営

(1)　消費構造からみた衣生活の経営

K家は概して被服費の比率が高いことが注目される。戦時下（8〜9%）を除いて殆んどの時期15%以上で最高は戦後〔9〕期の21.3%を示している。〔1〕期は戦前期間中では最も高く20.3%を占めている。これはK氏の弟の分家，2女の誕生，長女の成長期等に対する被服の必要に加えて，常雇いに対する仕着せもあり，被服の需要が高かったためと思われる。したがって〔1〕期の支出額は66.77円で〔2〕期に比較して50%多くなっている。〔3〕期から〔5〕期は一躍2倍に増大し130円以上の支出を示している。もとより之には先の食費の場合と同様に第

第6表 被服費の項目別支出

時期区分別平均額
単位円，( )構成比%

時期区分＼項目	被服費合計	和服	洋服	下着	仕立加工代	綿類	寝具	身の回り品	その他	呉服店払い
[1] 明治41～大正2	66.77 (100)	27.621 (41.4)	—	3.192 (4.8)	8.989 (13.5)	2.124 (3.2)	1.739 (2.6)	6.907 (10.3)	7.574 (11.3)	8.624 (12.9)
[2] 3～6	44.50 (100)	17.526 (39.4)	0.7 (1.6)	2.396 (5.5)	3.123 (7.0)	2.388 (5.4)	0.803 (1.8)	7.798 (17.5)	3.83 (8.5)	5.936 (13.3)
[3] 7～11	130.59 (100)	55.988 (42.9)	1.87 (1.4)	8.658 (6.6)	6.79 (5.2)	8.253 (6.3)	4.223 (3.2)	29.802 (22.8)	3.88 (3.0)	11.12 (8.6)
[4] 12～15	156.48 (100)	64.674 (41.3)	0.7 (0.5)	17.626 (11.3)	28.681 (18.3)	12.568 (8.0)	—	21.138 (13.5)	2.30 (1.5)	8.793 (5.6)
[5] 昭和2～6	136.64 (100)	59.216 (43.3)	2.01 (1.5)	11.884 (8.7)	17.05 (12.5)	6.462 (4.7)	2.66 (2.0)	22.332 (16.3)	1.51 (1.1)	13.516 (9.9)
[6] 7～11	75.35 (100)	30.036 (39.9)	2.58 (3.4)	8.378 (11.1)	3.53 (4.7)	1.49 (2.0)	0.382 (0.5)	13.038 (17.3)	—	15.916 (21.1)
[7] 12～16	66.58 (100)	35.744 (53.7)	4.04 (6.1)	7.924 (11.9)	3.784 (5.7)	1.25 (1.9)	—	11.586 (17.4)	1.252 (1.9)	1.00 (1.5)
[8] 17～20	78.17 (100)	18.205 (23.3)	4.613 (5.9)	4.268 (5.5)	7.336 (9.4)	0.25 (0.3)	—	32.488 (41.6)	1.51 (1.9)	9.50 (12.1)
[9] 22～24	5783.4 (100)	3397.75 (58.8)	228.18 (4.0)	745.35 (12.8)	134.6 (2.3)	16.52 (0.3)	—	799.00 (13.8)	462.00 (8.0)	—
[10] 25～28	16129 (100)	6952.50 (43.1)	2385 (14.8)	2828.75 (17.6)	733.50 (4.5)	293.75 (1.8)	707.50 (4.4)	1930. (12.2)	257.50 (1.6)	—

一次大戦による物価騰貴が作用していると思われるが，〔3〕期は長女，〔4〕期は2女の嫁入り前の年令に当たり，衣服の仕度がなされたことにもよると思える。しかし〔3〕期は家計費が大巾に上昇し，被服費の比率は9.7%と低く戦前期間中最低を示している。戦時下〔7〕〔8〕期は衣料事情の悪化と当時のK家の家族周期を反映し当然のことながら支出低下を示し，〔1〕期とほゞ同額の支出に止まっている。

被服費の内容を8分類し，その支出額および構成比の推移を第6表に示した。表中の「呉服店払い」は衣料品の掛買い払いであり，分類不能な支出である。全期間を通じ最も支出額の大きいのは和服であり，戦前期間はほゞ被服費の40%前後を占め，これも〔3〕期に増大し〔5〕期まで55円以上の高い支出が示されている。明治後期から昭和初年頃まで，絲合せ賃，織賃，染賃，仕立賃等の支出がかなりみられるが，まゆからの糸とりは母やK氏の妻の仕事であったが，織と染は依託加工によって和服地にしたことが推定でき，養蚕による自給衣料も多かったことが知られる。おそらくそれらは晴着用ではないかと思われる。養蚕が全面的に廃止された戦中，戦後は仕立賃の支払いのみになり，和服を家で縫うことが全くなくなっている。

洋服の購入は，戦前では大正6年に長男に外套22円，大正9，10年に運動用シャツ1.85円が求められている。昭和戦前期には夏服，運動着等主に子供用の洋服に限られる。比率は大正期は1%前後，戦時中は被服費の6%位を占めるにすぎない。戦後は洋服が和服と交代して現代服装の生活パターンがつくられてきたのであるが，〔10〕期は洋服および洋服用下着の購入がそれぞれ14.8%，17.6%と飛躍的に伸びている。

つぎに寝具についてみると戦前は2〜3年毎に綿打賃，またフトン皮，フトン綿が購入されており，寝具の管理にもゆきとゞいた配慮が行なわれている。大正初年には子供が生まれる用意として，わら布団，しき布団，かやを新調しており，K氏の子供の出生に対する心入れが感じられる。

和服についで概して比率の高いのは身の回り品の支出である。大正中期に当たる〔3〕期は被服費の22.8%を占め，全期間中最も高率で約30円が支出されている。

内容をみると，はき物では下駄の購入頻度が高く殆んど毎月1·2足の下駄が買われている。もちろん歯入れ賃，はな緒代もみられ，手入れをしてはき続けたことも推定できる。足袋は10月から2月頃までの冬期間毎月購入されている。晴着用の白足袋とは限らず，しかも明治後期から買い求めている。その他大正初期から洋傘，手袋，衿巻，かんざし等の支出もみられる。

大正時代は自由主義的風潮がひときわ目立ち，西欧的なものへの傾倒が一般的な風潮になり，加えて第一次大戦により大正4，5，6年頃は好況で活気を呈し庶民の生活にさまざまな影響を与えた時期である[13]。K家も大正前期，中期は家運の隆盛期で所得の上昇をもたらし，加えて当時は長女，二女の適令期で結婚の仕度という必要もあってのことか，和服や身の回り品の支出が多く，容儀に対する要求がかなり高いことが察知される。

(2)　購入財よりみた衣生活の変容

（和服）

明治・大正時代農家の衣生活は殆んど和服であったことはいうまでもない。衣生活に関し農村の女の歴史の中で麻が木綿に代ったことは見のがすことのできない革命であり，麻を栽培して着物をつくる自給自足から，木綿になったのは山間の村では明治末期から大正初年にかけてのことである。木綿の長着に羽織の着用が日常着として一般化したのは大正末期であるといわれる[14]。

K家は明治42年に紋付羽織，男物袷羽織を新調している。これは44年に養子に他出しているK氏の弟に持参させたものではないかと思われる。明治後期は和服地として縞木綿，無地木綿，晒木綿，浴衣地等が買われているが，半てん，袷等仕立てられた衣服の購入もみられる。大正時代には，絣，唐ちりめん，備後縞が変った種類として購入されている。多くは羽織地，反物と記載され，材料の詳細は不明である。明治末期の頃，町の市日には露店に反物や着物，木綿のはんぱ布が売られていたが，それは農家の人々にとっては眼の正月でしかなかったという当時にあって，K家の衣類の購入はかなり高いと思われる。

戦後は被服材料も豊富になり，一般的な衣生活の豊かさを反映し，和服の購入が著しく増加し〔9〕期は被服費の約60%を占めている。これは昭和22，23年当時銘仙940円，しぼり染の着物地3200円の大口支出によるものである。孫娘の結婚仕度とはいえ，終戦直後のヤミとインフレの中で農業経営が崩壊寸前にたち至った当時，経済的にかなり無理な負担ではなかったかと思われる。聞きとりによると孫娘と同年令だった外孫（二女の娘）を可愛がり着物を買う時はいつも2人分の用意をしてやったから大変な出費だったと話している。22年，23年は被服費の比率がそれぞれ23.6%と27.8%を示し家計費中最高の比率を示した。

（洋服）

明治初期，文明開化の象徴としてとり入れられた洋服が庶民の生活にはいりこんできたのは

13)　加太こうじ：衣食住百年　日本経済新聞社　130-140（1968）
14)　高橋九一：村の生活史　農山魚村文化協会　179（1978）

明治末期の頃である。しかし農村に及んだのはかなりおくれ，比較的着用の早かったのは村長校長，巡査ぐらいの者であった。K家では大正6年に長男の外とう，大正中期以降戦前は運動シャツまたは夏服が買われている。日常着として洋服が着用されたのは昭和10年頃からでそれも子供の夏の服装に限られたことが記録から知られる。したがってK家における衣服の洋風化は大正の初め子供の通学用から夏の日常着へと移行していることがわかる。昭和25年以降〔10〕期は孫の子供が出生し成長する段階で洋服の購入が多くなり，衣生活の洋風化傾向を反映している。

下着も股引，ふんどし，腰巻，はだこ等日本古来のものが戦前は買われ，メリヤスシャツ，さる股が求められるようになったのは大正後期以降である。スリップ，ズロース等洋服下着は戦後子供用が主であった。

（身の回り品）

はき物については，農作業のわらじやぞうりは冬の夜なべ仕事になされ，はき捨てであったから買われていない。明治後期より下駄の購入頻度が高いことより，日常は和服に下駄ばきあるいはゴム裏ぞうりをはいていたことが知られる。子供にはくつが求められている。

足袋も明治後期から礼装用の白タビに限らず日常用に紺タビ，色別珍が買われ使用されていた。

雨具は明治後期に番がさ，大正にはいるとからかさの他に洋がさの購入もみられる。当時洋がさは番がさの3倍ちかい価格であるが，毎年のように求め，またよく修理しつゝ使用したことが記録から知られる。

その他夏は麦わら帽，冬は首巻，手袋，装身具的なきんちゃく，かんざし，赤ん坊によだれかけ等が大正初期から買い求められている。以上衣生活の変容を概観した。明治以降の農家の衣生活の変化に就いては多くの研究調査がある[15]。衣生活の大きな変化は一般的には大正中期頃からである。すなわち第一次大戦を契機に発達した工業による商品生産の増大および好況による農家の購買力の上昇が要因と思われる。K家ではそれ以前の明治後期より多様な衣類が買われ支出額も概して高い。もちろん〔1〕〔2〕期は家族周期から需要が高かったものと思われるが，全期間にわたる衣服の購入を通してみるとき，K家は服装について関心が高く，お金をかけた生活であったことが推察される。

3)　住生活の経営（光熱を含む）

(1)　消費構造からみた住生活の経営

明治41年K家は同一部落内ではあるが，谷間にあった家から，平担地で耕地にも近く，蚕室，くら座敷，収納兼作業舎をもつより広い家に移転している。(宅地1反21歩・住居36坪)[16] これは村の資産家が住んでいた古い家を買いとったものである。住居費の比率を時期区分別にみると，戦前〔1〕期〜〔4〕期までは14%以上を示し〔1〕〔3〕期は21.9%，36.7%と食費に次いで比率が高い。〔5〕期以降戦時下〔8〕期まで10.8%から時期毎に漸減し5.5%に低下している。戦後は再び14%以上の高率となる。

住居費の内容を家屋修繕，家具，食器厨房器具，設備修理，電気器具，その他の項目に分類

---

15)　西岡虎之助：民衆生活史研究　福村書店　(1949)
　　渋沢敬三：明治文化史　生活編　洋々社　(1955)
　　家政学総合研究会生活史班：家庭経営の変動に関する生活史的研究　第一報　(1974)
　　第二報　(1975)
16)　大場正巳：農家経営の史的分析　東洋経済新報社　166 (1961)　　第三報　(1979)

第 7 表　住居・光熱費の項目支出

時期区分別平均額
単位円，( )構成比%

時期区分＼項目	住居費合計	家屋修繕費	家具	食器・厨房	設備修繕	電気器具	自転車	その他	光熱費合計	石油	木炭	薪	電気	その他
[1] 明治 大正 41 ～ 2	71.94 (100)	47.98 (66.7)	1.55 (2.1)	10.46 (14.5)	5.40 (7.5)	—	—	6.55 (9.2)	15.92 (100)	6.36 (40.0)	6.98 (43.8)	2.55 (16.0)	—	0.03 (0.2)
[2] 3 ～ 6	44.11 (100)	30.52 (69.2)	1.18 (2.7)	6.97 (15.8)	4.47 (10.1)	—	—	0.97 (2.2)	16.844 (100)	6.528 (38.8)	9.166 (54.4)	1.15 (6.8)	—	—
[3] 7 ～ 11	493.011 (100)	455.02 (92.3)	1.38 (0.3)	28.28 (5.7)	6.78 (1.4)	—	—	1.551 (0.3)	52.839 (100)	16.69 (31.6)	28.04 (53.1)	4.829 (9.1)	3.28 (6.2)	—
[4] 12 ～ 15	128.05 (100)	46.39 (36.2)	3.96 (3.1)	10.22 (8.0)	9.67 (7.5)	0.90 (0.7)	17.64 (13.8)	39.27 (30.7)	56.46 (100)	7.55 (13.4)	14.96 (26.5)	12.78 (22.6)	20.72 (36.7)	0.45 (0.8)
[5] 昭和 2 ～ 6	81.92 (100)	65.24 (79.6)	1.6 (2.0)	6.59 (8.0)	3.53 (4.3)	0.60 (0.7)	3.64 (4.5)	0.72 (0.9)	31.944 (100)	3.36 (10.5)	7.84 (24.5)	0.994 (3.1)	17.61 (55.1)	2.14 (6.8)
[6] 7 ～ 11	60.57 (100)	43.95 (72.6)	2.75 (4.5)	4.80 (7.9)	5.95 (9.8)	0.32 (0.5)	1.68 (2.8)	1.12 (1.9)	49.84 (100)	5.32 (10.7)	19.77 (39.7)	3.79 (7.6)	19.72 (39.6)	1.24 (2.4)
[7] 12 ～ 16	60.69 (100)	42.77 (70.5)	6.45 (10.6)	2.67 (4.4)	6.80 (11.2)	0.83 (1.4)	—	1.17 (1.9)	39.93 (100)	0.66 (1.7)	11.36 (28.5)	3.18 (8.0)	20.52 (51.4)	4.21 (10.5)
[8] 17 ～ 20	47.70 (100)	33.85 (71.0)	1.15 (2.4)	4.71 (9.9)	3.84 (8.0)	2.08 (4.4)	—	2.07 (4.3)	35.30 (100)	—	3.83 (10.9)	9.10 (25.8)	19.45 (55.1)	2.93 (8.2)
[9] 21 ～ 24	3882.70 (100)	3324.70 (85.6)	—	259.75 (6.7)	140.25 (3.6)	118.00 (3.0)	14.25 (0.4)	25.75 (0.7)	1132.138 (100)	41.25 (3.6)	322.5 (28.5)	94.138 (8.3)	504.25 (44.5)	170.0 (15.1)
[10] 25 ～ 28	11826. (100)	8728.50 (73.8)	125 (1.1)	715 (6.0)	612.50 (5.2)	425.75 (3.6)	1197.50 (10.1)	21.25 (0.2)	3649.50 (100)	—	1153 (31.6)	259.5 (7.1)	1799 (49.3)	438 (12.0)

し考察をしてみる。第7表に示すように住居費中最も支出額の多いのは家屋修繕費である。大正後期に当たる〔4〕期を例外に，いずれの時期においても住居費の66%以上が家屋の維持修理費である。〔1〕期はとくに家屋修繕，食器厨房器具の支出が多いことが目立つ。これは新居の移転に伴なう改修等によるもので，風呂の設置，屋根替え，たゝみ替え，膳をはじめ鍋類等台所用品が買われている。聞きとりによると移転した家は，旧家とはいえ雨漏りがする程で，相当いたんでいた。家財道具はそのまゝ残し弟が使うので，全て新しく買わねばならなかったと言うことである。〔1〕期は家屋修繕に約48円，食器類に10.46円が支出され他の時期より多い。

〔3〕期は家計費中最も高い支出を示した時期で，実に家計費の37%に当たる493円に達している。その中の92%が家屋建築費である。すなわち前述したように，大正8，9年の両年にわたり土蔵の建築費として，それぞれ1636.36円と356.7円の支出があったことによる。大正3年以降農村は大戦により好況期を迎え，K家では，先にも述べたように米価，糸価の高騰，紙販売の高収益により所得の増大をもたらした。この時期の所得余剰が蓄財された結果，屋敷が整備された。古い蔵二棟の他に更に新しく建て増しされたのであるが，かなり家運の発展した時期であったことが推察される。

家屋修繕費として多く目につくのは屋根のふき替えである。かや屋根の寿命は40〜50年であるから，一生のうち一度は大々的に行なわねばならなかった。一般に農村の家普請はその材料のかやも無尽講で準備し，村人の助け合いで行なわれた。K家ではかや，杉皮，板材が購入され工賃も支払われており，無尽にたよらないで2〜3年に1度位は屋根修理が行なわれていた。家屋が大きく順次さしかやを行ない4〜5年で1巡し，またくりかえすというように屋根ふきは大仕事のひとつであったといわれる。大正の末頃からかや屋根の他に板屋根，トタンぶき屋根の改修費もみられる。その他たゝみ替え，井戸修理も随時行なわれている。

つぎに家具費についてみると時期別には〔7〕期に6.45円の支出がある。これは最も高い支出であるが住居費の10.6%を占めるに止まる。その内容は香ろ台，鏡の購入である。比較的金額の大きなめぼしい家具としては大正2年に茶タンス(5.31円)，昭和16年に掛軸(7.7円)が購入されたことであり，他には花むしろ，花瓶，額等の支出が散見される程度で金額も少ない。比率も各時期1〜4%を示すにすぎない。

食器厨房器具は，茶碗，皿小鉢類の消耗品の補充にとゞまらず，冠婚葬祭用の膳椀一式，酒盃あるいは重箱，餅つき臼，什器類がかなり買い求められている。〔1〕期は新居への移転に伴なう用意のため，〔3〕期は家族に不幸が重なり人寄せの必要上，戦前期間中では比較的支出額が多い。〔1〕期は住居費の14.5%を占め10.46円，〔3〕期は5.7%で28.28円が支出され，家財家具費中主要な支出をなしている。

設備修繕費の内容は，桶のたがかけ，鍋の鋳かけ，煤灯張り替え，のこぎり目立て，バケツ修理等修繕費が主要な支出で新規購入の設備としては特にみられない。

耐久消費財ともいえる自転車が大正12年に70.5円で買われている。自転車が庶民の乗物となったのは明治30年代である[17]。K家ではそれより大分あとであるが，大正12年当時村では2台しかなく，そのうち1台はK氏が乗りまわし村人の注目を集めていた。K氏は歩行が不自由でも自転車を自由に乗りまわし，晩年まで自転車でどこへでも出掛けたということである。その後タイヤの交換等時々修理しつゝ使用したことが記録から知られる。戦後昭和23年に中

17)　日本風俗史学会：日本風俗事典　弘文堂　277 (1979)

古車が買われ，27 年には 3500 円で新しい自転車が求められている。その年，孫の子供には三輪車が 550 円で購入されている。

「その他」の項目の支出で目につくのは〔4〕期の支出である。39.27 円の支出は，家屋修繕費に次いで多く，住居費の 30.7% を占めていることである。これは大正 12 年に諸品代 153.75 円の支出があったことによるが，この年，K家に特別の事情があったとも考えられず，購入品目の内容は不明である。

(2)　住生活の変遷

耐用年数の長い住宅は，一度建築すれば，火災などの災害でもない限り修理を加えながら老朽するまで使用するのが常である。したがって明治 41 年新居に移転以来，大正期，昭和期を通じ，K家の家屋の構造上には大きな変化は認められない。しかし部分的な修理に際しては新しい建築資材が用いられてきたことは記録から知ることができる。たとえば屋根ぶき材料に杉皮，かやの他に大正 10 年以降はトタン板が用いられるようになり，昭和 7 年には部分的に瓦屋根にしたことが知られる。また昭和 12 年頃から建具は板戸から硝子戸に代わる。こうした結果住居の耐久性が増し，採光が良くなるなど若干の住生活の向上がみられる。昭和 10 年，11 年頃はコールタール塗りが多く行われているが，この頃は家屋も相当老朽化が進んだものと思われるが，当時は経済的に建て替えも容易でなかったので，維持管理の応急処置が行われたものであろう。

住生活の大きな変化は大正 10 年頃，照明がランプから徐々に電灯に変ったことであろう。電球，電気笠等が〔4〕期以降（大正 12 年以降）購入されているが，電気料は大正 9 年から支出されている。もとより当初はランプとの併用であったことは灯油代の支出から推定できる。電気料の増大に伴なって灯油代は減少を示している。

給水方法については井戸機械取替え，井戸ポンプ修理費がみられることから，井戸水が利用されたことが知られる。清冽な河川が製紙業を発達させた地域であり，豊富な地下水にめぐまれた関係上，当部落は水道設備の普及はおくれたといわれる。しかし大正元年と大正 12 年に 0.5 円の水道料の記載があり，甚だ疑問であった。聞きとりによると，現在は埋立ててぶどう畠になっているが，屋敷の裏庭を巡り大きな池があり，鯉をおよがせていた。その池に水を入れるために水源から引いた鉄管の修理費であったということである。時折鯉を買ったことが記録にみられ，広い宅地つゞきに桜桃畑，自作田を持ち家格の高い屋敷構えであったことがわかる。現在は家はこわされて昭和 44 年に建て替えた近代的な住居である。

(3)　光熱費の推移

第 7 表によってみると，明治・大正時代は光熱費の 44〜54% が木炭の購入であり，支出額も他の燃料に比べ多い。木炭は明治後期以降K家の養蚕に温暖育が導入され，蚕室にも使用されたので生産用に使用した費用も含まれていると考えられる。〔3〕〔4〕期木炭の購入が〔1〕〔2〕期の 2〜3 倍に増加している。このことは，K家においてこの時期が養蚕の拡大期であったことと一致している。

石油は年 2〜3 回，缶入でまとめ買いをしている。大正 9 年以降電灯料が支払われているが，ランプと併用し徐々に灯数をふやしたと考えられる。電灯料は大正 13 年から年間 3〜4 円の支出から 20 円代に増大し，大正後期以降は電灯料が光熱費の 50% 以上を占めるに至る。

薪は大正 7 年に 160 束 12 円，大正 12 年に 37 円支出された外は，ごくまれに少額の買入れがみられる程度である。「木下し運賃」，「株割経費」が記録されていることから官山の株割の

木を伐採した自給燃料の補充に買い求めたものと思われる。他に柴木，松葉，杉の葉，付け木がよく買われている。農家において一般に自給率の高い燃料もK家では現金購入をしている。

4) その他の諸費と経営

(1) 保健衛生費

その他の諸費の中では保健衛生費の比率が概して高い。特に大正後期から終戦までの〔4〕期から〔8〕期は家計費の 11～18% を占め，なかでも〔6〕〔7〕期は食費に次いで支出の多い費目になっている。

保健衛生費の内容は第8表にみるように〔8〕期を除き各時期とも医薬・医療費が圧倒的に多い。K氏の子供等は度々罹病し，4人中2人は大正時代に，1人は昭和11年に死亡したことは先にも述べた。〔4〕～〔7〕期はまさに家族に病人がつゞき治療費，入院費，往診の車代等多額な支出がかさみ，高い比率をまねいたのである。

病気の治療以外に針打，灸立，あんま賃が全期間を通じて支出されている。これはK氏の治療代であり，足の治療を根気よく老年まで続けたのであろう。

医薬代は越中の置薬の他に売薬も多く求めている。熊の胃，薬用酒，薬草，中将湯など常用したことがよみとれる。

その他の項目は療養を目的とした入湯費，病人用の卵・牛乳等の栄養食品である。牛乳，卵，時には牛肉など病人には毎日与えられており，大正後期から昭和初年にかけて，長男が療養のために祖母と長期間，温泉に逗痛したことが記録によって知られる。ともあれK氏は二男つゞいて長女と，二人の子供をなくした大正11年以降，所得が低下し家計の縮小を余儀なくされた中でも，長男の健康維持に関する費用は惜しまなかったのであろう。みんな健康であった時期の 3～4% に比べて最高の 12% を占めた医療費がK家の家計に与えた影響はみのがすことができない。

理容費については，しらが染，びん付油，元結，かもじ等結髪用の支出が戦前多くみられる。これはおしゃれなK氏の母親が使用したものである。また明治後期から髪刈，髪切り，ひげそり代がみられ，床屋に行って整髪したことがわかる。石鹸，はな紙の使用も大正の初期からみられ，10年以降は購入頻度も増加している。大正13年にはクリームが買われているが，大正時代の一般農家の人々が，髪を自分で束ね，化粧もせず労働にあけくれした生活であったのと比較して，身だしなみに対しても関心が高かったことが知られる。

(2) 教育費

K家の教育期は第1図にみられるように，K氏の子供等の就学期である〔2〕～〔4〕期および孫の代の〔7〕〔8〕期である。K氏の子供が未就学である〔1〕期において明治41年に20円，42，43年にそれぞれ19.93円の学費が支出されている。その結果〔1〕期の平均額は19.09円で〔3〕期とほゞ同じ支出を示しており，比率は全期間中最高の 5.8% を占めている。この時期の学費はK氏自身のものか，弟のものかは不明である。

教育費の最も多かった時期は長男が農学校，二女が裁縫学校であった〔4〕期で学費が15.89円学用品，その他で31.04円 (3.4%) が支出されている。戦時下は孫の教育期であるが，それ程多額な支出ではない。しかし家計費が縮小された時期のため比率は 2.6～2.9% と他の時期に比べ若干高くなっている。

K氏は子女の教育にも熱心で，女子には義務教育終了後裁縫学校に入れて実務教育を受けさ

第 8 表　保健衛生費・教養娯楽費の項目別支出

時期区分別平均額
単位円，( )構成比%

時期区分＼項目	保健衛生費合計	医薬	医療	衛生用品	理容	その他	教養娯楽費合計	新聞・雑誌	教養・諸会費	聴視・観覧	趣味・娯楽	信仰費	入湯・遊山	その他
[1] 明治 41 ～ 大正 2	9.462 (100)	3.67 (38.8)	3.245 (34.3)	0.122 (1.3)	0.488 (5.2)	1.937 (20.4)	11.761 (100)	0.016 (0.1)	2.386 (20.3)	—	0.162 (1.4)	5.636 (47.9)	3.376 (28.7)	0.185 (1.6)
[2] 3 ～ 6	10.773 (100)	4.279 (39.7)	4.518 (41.9)	0.508 (4.7)	0.221 (2.1)	1.248 (11.6)	11.195 (100)	—	2.101 (18.8)	—	2.322 (20.7)	1.980 (17.7)	3.317 (29.6)	1.475 (13.2)
[3] 7 ～ 11	117.501 (100)	18.548 (15.8)	71.568 (60.9)	12.476 (10.6)	1.497 (1.3)	13.412 (11.4)	38.088 (100)	8.05 (21.1)	4.242 (11.1)	0.03 (0.02)	0.87 (2.3)	9.441 (24.8)	14.904 (39.1)	0.55 (1.6)
[4] 12 ～ 15	107.988 (100)	16.298 (15.1)	56.375 (52.2(	3.375 (3.1)	2.153 (2.0)	29.788 (27.6)	32.633 (100)	4.458 (13.7)	8.57 (26.3)	2.688 (8.2)	4.545 (13.9)	12.053 (36.9)	—	0.311 (1.0)
[5] 昭和 2 ～ 6	78.078 (100)	21.48 (27.5)	23.88 (30.6)	4.678 (6.0)	3.906 (5.0)	24.134 (30.9)	23.492 (100)	7.332 (31.2)	4.816 (20.5)	0.53 (2.3)	1.01 (4.3)	8.788 (37.4)	0.32 (1.4)	0.696 (2.9)
[6] 7 ～ 11	81.862 (100)	28.708 (35.1)	43.052 (52.6)	1.674 (2.0)	0.942 (1.2)	7.486 (9.1)	18.908 (100)	0.946 (5.0)	3.518 (18.6)	0.638 (3.4)	1.23 (6.5)	11.244 (59.5)	0.56 (3.0)	0.772 (4.0)
[7] 12 ～ 16	95.768 (100)	44.616 (46.6)	36.06 (37.6)	1.572 (1.6)	2.744 (2.9)	10.776 (11.3)	27.78 (100)	2.976 (10.7)	8.446 (30.4)	0.61 (2.2)	1.73 (6.2)	13.618 (49.0)	—	0.40 (1.5)
[8] 17 ～ 20	160.80 (100)	30.278 (18.8)	31.695 (19.7)	0.695 (0.4)	5.41 (3.4)	92.724 (57.7)	61.45 (100)	14.145 (23.0)	13.932 (22.7)	4.625 (7.5)	4.20 (6.8)	19.348 (31.5)	3.80 (6.2)	1.40 (2.3)
[9] 21 ～ 24	1642.353 (100)	157.95 (9.6)	598 (36.4)	85.65 (5.2)	82.625 (5.0)	718.128 (43.8)	1553.34 (100)	349.5 (22.5)	54.5 (3.5)	231.5 (14.9)	290. (18.7)	576.59 (37.1)	—	51.25 (3.3)
[10] 25 ～ 28	8492.6 (100)	1170 (13.8)	3237.5 (38.1)	233.8 (2.8)	225 (2.6)	3626.4 (42.7)	5153 (100)	1375.5 (26.7)	1282.5 (24.9)	647.5 (12.6)	186. (3.6)	1157.75 (22.5)	447.5 (8.7)	56.25 (1.0)

せ，長男には農業経営の後継者として農学校に進ませる等，教育に対する費用を惜しまなかった。

(3)　教養娯楽費

教養娯楽費は戦後になって家計費の6%を占めている。しかし戦前はわずか2〜3%を占めるにすぎず著しく少ない。支出内容を新聞，雑誌等の印刷物，教養的な諸会費，趣味娯楽費，信仰費等に分類した第8表によってみよう。

新聞の定期購読は大正8年より行なわれているが，昭和4年から15年までの12年間は，なぜか全く購入されていない。戦後は地方紙と農業新聞が購読されている。

雑誌類は，明治後期から大正期を通じて蚕糸会報を定期的にとり，養蚕経営の情報源として購読していたことがよみとれる。その他昭和初期にキング，主婦之友等の書名がみられるだけで，多くは「雑誌」とだけ記載され大正10年頃より年に2〜3回購入されている。大正4年から数年間は大戦の影響による好況期を迎え，食料品をはじめ織物，図書を中心とした大量消費産業が発達した。一方自由主義的な風潮が目立ち，文学，演劇，美術などの文化が花開いた。出版物を例にしても講談本，文庫本が大量に出版され庶民に愛読された。しかしその主な利用者は都市の中流階級が中心であって，農民には及ばなかった[18]。K家においても，明治から大正初期は経営の拡大期で時間的余裕がなかったともいえ，雑誌の購読はかなりおくれている。

教養的な支出として文具，諸会費がある。筆，すみ，奉書等の購入頻度が高い。K氏は青年時代寺で漢詩を学び，文筆にたけていたと云われているが，短歌を作ったり，種々の講習会，村の会合に出席していた。養教的な支出は殆んどK氏自身の消費によるものであった。

娯楽・趣味的な支出は謡曲会，短歌会の費用やそれに関する本の支出である。K氏の趣味的支出であるが，大正10年頃より継続してみられる。大正元年にはじめて写真0.34円の記録があり，戦前まで2〜3年に1度位の頻度で写真がうつされている。しかし誰の写真をとったものかは不明である。明治20年代から写真は流行したが，「写真をうつすと影がうすくなり早死にする」という迷信もあった。しかし写真屋が大繁盛し，アマチュアの写真道楽もあったといわれる[19]。農村では大正時代でも写真をうつすことはまれなことであった。

その他能楽の観賞，活動写真，芝居見物も大正後期から昭和初期にかけて行なわれている。また明治から大正にかけて羽子板，カルタを子供等に買い与え，長女の初節句にひな人形を買い求めるなど，昭和初期までのK家は農家としてはかなり文化的水準の高い生活であったことが推察される。

戦後は「聴視・観覧」，「趣味・娯楽」の項目の比率増大が顕著である。その内容の主要なものはラジオ聴取料で昭和19年から支出が開始されている。25年以降は芝居，浪花節，映画等の回数も多く，カメラ，鯉のぼり，人形や頑具等が買われている。いわば三世代目の孫夫婦による戦後の新しい生活思想を反映した消費態度を示すものといえよう。

入湯費は湯治以外の温泉行きで戦前の特に〔1〕〜〔3〕期に大きく，毎年7〜8月または11月に大きな支出がみられる。殆んど足の治療を目的にしたK氏の入湯費であるということであるが，他の家族も農閑期を利用して温泉に行き療養をかねて骨休めをすることが，観劇など全く行なう機会のないこの時期は，唯一の娯楽であったと思われる。

信仰費も全年度を通じ一貫した支出で教養娯楽費のなかでは18〜60%と比率の高い支出で

18)　前掲 4) と同じ　125-126
19)　加太こうじ：　衣食住百年　日本経済新聞社　61 (1968)

ある。K氏は常に神社祈祷，寺参りを欠かさず，菩提寺に布施を時折行ない，仏具，仏花を求め神仏を祭る外，伊勢参りを2度も行なった信仰心の厚い人であった。

(4)　交際費および寄付

農家家計の特色として交際費の高率が指摘され，家庭経営上の問題点とされてきたが，K家においても戦前は4〜6%，戦中は9〜10%，戦後は7〜8%である。部落の上位の農家であったため交際費もけっして少なくはなかった。其の他の諸費中，保健衛生費に次いで高い比率を占める。時期区分別の交際費を第2表によってみると〔1〕期の14.21円から〔3〕期は36.38円と大巾に増大している。その後農村不況に当たる〔6〕期は一時支出の減少を示すが，時期毎に交際費は漸増傾向を示している。家計費に対する比率は低い時で2.7%，高い時で6%と概して低い戦前に比べて，戦時下〔7〕〔8〕期はそれぞれ9.1%，10.2%と高くなっている。当時K家は経営的にピンチを迎え所得が低下した時期にあって家柄上，村つきあいが重視され，交際費の節約もならず，高率を招いたものといえよう。戦後は7〜8%と若干比率が低下している。

交際費はまた家族周期とのかゝわりにおいても変化するものと思われるが，支出額は各年次の浮動性の中で家族周期による変化は明確にはみとめにくい（第1表参照）。出生，死亡，結婚の年には臨時費は伴なうが必ずしも交際費の増加をきたしていない。

交際費をその機会ごとに7項目に分類し，時期区分毎の平均額を求め第9表に示した。これによると戦前，戦後の各時期とも支出の多いのは祝金，見舞，悔等のつきあい費である。帳簿には単に「祝い」，「見舞金」と記載されているものが多い。祝儀不祝儀をはじめ，年始，出産，初節句，卒入学，病気等の支出がみられる。これらは親戚や村人との義理上の付合いであり，頻度も高い。また校長，巡査，教員に対し，年始や餞別を行なう等個人的なつきあいもある。

K氏は昭和8年から10年まで村議をつとめた外は何ら役職に就いていたわけではないが，消防組，青年会，各種後援会，学校等殆んど毎年なんらかの寄付行為を行っている。これら寄付金は雑費としてあつかっているが，大正8年には菩提寺本山へ100円，消防へ10.5円の寄付がなされている。時期区分別の平均額でみれば〔3〕期は77.7円を示し，戦前期間中最も多い雑費支出をなしている。また戦時下は入隊の送別や餞別および戦死見舞，悔金の支出が多いことが時代的な特徴としてみられる。

また戦時下〔7〕〔8〕期は交際費とともに雑費の比率も他の時期より著しく高く15.3〜16%を示している。その内容は大政翼賛会の傘下にある農業報国連盟，海運報国会，大日本婦人会など戦争協力組織にかゝわる奉公会，国防費，海軍協会費等年に10〜32円の支出がなされている。さらにこの期は寄付も多く時期区分別の平均額で100円ちかい支出がみられる。特に目立つ年度は，両親の死亡した昭和14年で，菩提寺に50円，八幡神社へ20円，高松小学校へ150と200円余の寄付がなされている。20年には学校増築に際し200円を，災害者見舞として20円の寄付をしており，この年324.9円の雑費支出は最も支出の多い食料費（203.83円）を大巾に上回っている。交際費や寄付の多いことは部落におけるK家の家格を示すものといえるが，生活をつめても外に対しては出すという氏の人柄のあらわれともみられる。

(5)　臨時費

冠婚葬祭に伴なう臨時費は，農家家計上交際費と共に問題点とされてきた費目である。第2表の時期区分別平均額をみれば，家計費に占める比率の高いのは〔2〕期である。これは大正3年弟の分家というK家の特殊事情によるもので，分家に際し贈与金，相続経費等156円余の臨

第9表 交際費の項目別支出

時期区分別平金額
単位円，( )構成比%

時期区分	交際費合計	祝金	餞別	土産	謝金	見舞	悔	その他
[1] 明治 大正 41 ～ 2	14.214 (100)	4.45 (31.3)	0.476 (3.4)	3.076 (21.6)	2.60 (18.3)	2.478 (17.4)	1.134 (8.0)	—
[2] 3 ～ 6	10.719 (100)	2.489 (23.2)	0.485 (4.5)	2.058 (19.2)	1.225 (11.4)	3.27 (30.5)	1.037 (9.7)	0.152 (1.5)
[2] 7 ～ 11	36.384 (100)	18.826 (51.7)	1.844 (5.1)	0.09 (0.3)	0.988 (2.7)	8.296 (22.8)	4.88 (13.4)	1.46 (4.0)
[4] 12 ～ 15	44.767 (100)	18.737 (41.8)	2.475 (5.5)	0.65 (1.5)	0.49 (1.1)	12.612 (28.2)	9.635 (21.5)	0.167 (0.4)
[5] 昭和2～6	45.748 (100)	19.27 (42.1)	1.46 (3.2)	0.894 (2.0)	1.288 (2.8)	11.116 (24.3)	11.198 (24.5)	0.522 (1.1)
[6] 7 ～ 11	38.65 (100)	17.038 (44.1)	1.98 (5.1)	2.276 (5.9)	0.06 (0.2)	7.612 (19.7)	9.684 (25.0)	—
[7] 12 ～ 16	74.00 (100)	16.72 (22.6)	19.07 (25.8)	2.63 (3.6)	1.63 (2.2)	19.00 (25.7)	14.95 (20.1)	—
[8] 17 ～ 20	89.39 (100)	15.15 (17.0)	29.59 (33.1)	0.12 (0.1)	0.75 (0.8)	25.45 (28.5)	18.32 (20.5)	—
[9] 21 ～ 24	1804.7 (100)	657.7 (36.4)	57.5 (3.2)	72.5 (4.0)	145. (8.0)	313.2 (17.3)	558.7 (31.1)	—
[10] 25 ～ 28	6828.9 (100)	2097.5 (30.7)	377.5 (5.5)	82.5 (1.2)	342.5 (5.0)	2400.1 (35.1)	1528.7 (22.5)	—

時費があり，家計費の 13.1% を占めた。ついで多いのは 9.7% を示した〔8〕期である。これは昭和17年に墓石を建て法要を行なった費用 400 円の臨時費によるものである。

他の時期は婚礼，葬式，年忌法要に伴なう支出である。婚礼は明治 44 年にK氏の弟，昭和6年に長男，23 年に孫のために行なわれている。しかし臨時費としては23年を別にすれば，昭和3年に 150 円の結納金が見られる丈である。この 150 円の支出は家計費の 14.4% にあたり，最も高率であった被服費の 16% につぐ支出であり，当時K家にとってもかなり大きな出費であったといえる。これは養女に出した二女の結婚についての結納金であったといわれている。

昭和23年の孫の結婚に際しては，婚礼費 8300 円が支出され，この年も家計費に占める比率は被服費についで高く 19.9% を示している。仏事に関する臨時費は，第2表でみられるように2男・長女，長男，父母，妻の死亡した各年次に葬式の諸経費が支出されている。その中で多額な費用をかけ盛大な弔いをしたことが推察されるのは長男の葬儀である。死亡した昭和 11 年には 270 円の葬儀経費の臨時支出があり，実に家計費の 25.8% を占める多額な支出であった。

婚礼や仏事に際し被服費，住居費がどうかゝわっているかをみると，結婚の 1～2 年前は被服の支出が若干多くなってはいる。婚礼は嫁取りの関係から衣類の新調が大々的に行なわれてはいない。しかし孫娘の結婚に際しては，当時衣類が切符制であったが，配給ルート以外の方法をとったものと推察できる。相当無理をして高価な嫁入り仕度をしたことがよみとれる。住

まいについては人寄せのために，たゝみ替え，屋根修理等が行なわれている。これらは随時行なわれていることで特別住まいを整備するための支出の増大はみとめられない。第1表の年次別消費支出によってみても臨時支出のあった年に必ずしも家計費総額が増大しているとは限らず，婚礼や仏事に当たり集中的に巨額な出費にならないよう配慮した生活態度をみることができる。

結　　語

以上，45年間にわたるK家の家計記録の分析を通し，前報の所得構造の推移をふまえ，費目別消費支出や消費構造の推移を家政のあり方の視点から考察してきた。

K家の歴史は端的にいって，明治後期の大農から中農へ，さらに零細自作農に低落し，戦時中から終戦直後は自作農崩壊の危機に当面し，戦後自作農中堅農家として再生する過程であった。この間の消費支出の推移を検討した結果を要約すると

(1)　消費支出は大正中期〔3〕期（大正7〜11年）を頂点に，しだいに縮小し，戦争終結まで消費支出の著しい実質低下が明確に示された。

(2)　消費支出配分構造は戦前，戦中，戦後とそれぞれ特異なパターンが示された。

戦前　〔1〕期〜〔6〕期　基礎的生活費の段階的低下が特徴的である。〔1〕期は基礎的生活費が72%を占め，住まいの移転，むこ入等K家の家族周期によるパターンが示された。〔3〕〔4〕期は基礎生活費とともに教養・交際にも意を用いた比較的バランスのとれた消費生活で家運の隆盛期を示す配分構造がみられた。〔4〕期以降は実質家計費の減少とともに医療費の比率が増大することによって基礎的生活費の比率低下が示された。いわば意図的に生活の切りつめを余儀なくされた配分構造といえる。

戦中　〔7〕〔8〕期　長男の死，妻の離別がK家の家族周期を狂わせ，農業経営に危機を招いた。家計費は低い水準にとゞまり，老夫婦と孫との衰退的家族の消費生活を示すパターンである。

戦後　〔9〕〔10〕期　基礎的生活費は戦前水準にもどり，労働力の補充によって経営的にも起死回生の策が成功し生活も安定した消費構造が示された。

(3)　K家は一般の農家経営の特徴である自給経済的側面を持ち，明治・大正期は昭和期と比べて生産，消費ともに大きかった。

(4)　K家の生活状態は昭和初期まで購入財からみて一般農家よりかなり高レベルであったことが知られた。K家は養蚕，製紙という換金率の高い商品生産を大規模に行なっていた関係から，小作地の拡大に専念した地主に比べて消費面においておおようで気前のよさがあったものと推測される。

以上1·2報を通してみた結果，明治初期のK家は製紙・養蚕を主体にした自小作中農の規模をもつ農家であった。一代目記帳者S氏，二代目Y氏共に篤農家で，製紙技術をもつ娘を部落内から妻に迎え，安定した家族労働力をもって生産に励み，農地の拡大をはかり経営規模を発展させてきている。その結果明治後期は米作を基盤とした自作農家として大農という一応の経営目標が達成されたものとみられる。

しかし三代目K氏は自ら労働に従事することができなかったので大正後期以降，家族の働き手は老令の父とK氏の妻のみになり，自作地の縮小と雇用労働力依存を余儀なくされたのであ

る。更に昭和11年長男を失ない戦時中は全く働き手がなくなり，加えて戦後の社会の激変に遭遇し老夫婦と孫の生活は経済的な危機にたち至った。

K氏は単に家長として家族や雇人を指図するのみで趣味に生きた人物であったと云われているが，記録を通してみたK氏は広く新聞，雑誌を読み経済界の動きを察知する見識の持主でもあった。それは失敗に終ったとはいえ株に投資して財産収入を得る等農業以外の有利性にも着目していた一例でもわかる。また不況・凶作などその時々の社会状勢や家族の変化に対し経営の縮小，生活のひきしめによって対応している。これらの事から考えてK氏の経営の重点は先代が企業的経営によって築いた大農的自作農の地位を維持発展させることにあったと思える。しかし事志とちがい没落の危機に至った最大の要因は後継者を失ない家族労働力の維持が全く不可能になったこと，加えて戦争という国家的社会的な大勢の影響によるものである。戦後いち早く義務教育を終えた孫娘にむこ養子を迎えたことも，農業経営の再生をはかりたい一心から労働力の確保を優先したものと推察される。

Y氏，K氏は家計簿の冒頭に毎回必ず「天福皆来」，「地福円満」の言葉を記載し，一貫した信念をもって家政をとりしきってきている。家計運営については収支実態の把握により，収支バランスをはかり，家父長的な宰領の下に一括管理が行なわれたといえる。K氏の経営に対処する計画性については記録の面から十分知り得ないのが残念である。ともあれ詳細な家計の記録によって家の歴史を継続しようとした意志は並の人間以上の努力と考えられる。K家の歴史過程は日本農業の展開過程と密接不可分なものである。大多数農家の中の一事例とはいえ，一自作農家の発展・隆盛期から崩壊に至り，再生への長期的な家計構造の事例としてみることができた。

稿を終るにあたり，快く資料の分析を承諾下さり，度々訪問に応じて下さったK家の方々に深く感謝申し上げる。

参　考　文　献

1) 大場正巳：農家経営の史的分析　明治初期以降農地改革にかけての東北一農家経営の展開構造　東洋経済新聞社　(1961)
2) 後藤和子：K家・家計記録の生活史的研究　そのI一所得構造の推移を中心として一岩手大学教育学部研究年報　第38巻　(1978)
3) 家政学総合研究会生活史班：家庭経営の変動に関する生活史的研究　第一報　(1974)
4) 同　上　第二報　(1975)，　第三報　(1979)
5) 遠山・今井・藤原：昭和史　岩波書店　(1978)
6) 小林良彰：昭和経済史　ソーテック社　(1975)
7) 内野達郎：戦後日本経済史　講談社　(1978)
8) 松本正雄：昭和50年史　汐文社　(1901)
9) 梅津和郎：成金時代　教育社　(1978)
10) 加太こうじ：衣食住百年　日本経済文聞社　(1968)
11) 高橋九一：むらの生活史　農文協　(1978)